成れの果て

なし崩し

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロキ・ファミリアに居座る、かつて英雄だった男の成れの果て。やる気がないわけではないし、任された仕事はしっかり果たす。それでも傍からみればその男、いつ仕事をしているのか分からない、遠征にも参加しないとまるでダメな大人であった。その男、いつからか主神より名前を賜った。その名を、マダオと言った。

目次

プロローグ ―― 1
一話 ―― 8
二話 ―― 16
三話 ―― 25
四話 ―― 33
五話 ―― 41
六話 ―― 49
エピローグ ―― 57

プロローグ

晴れ渡る青い空、つまるところ快晴。

最も俺が好きな天候であり、最も気持ちよく昼寝ができる最高の天気。

だというのに、俺の意識を刈り取らんとばかりに鋭い拳と蹴りの応酬が止まらず、周りからはもっとやれーなどと物騒な外野の声が聞こえてくる。

その中にはこの騒ぎを止めるべき我らが主神までも加わっており、止めてくれそうな仲間は誰一人いない。

いや、正確には一人いるのだが良い薬だと言って早々に見捨てられた。

「あはは！　いつぶりだろーね、こういうの！」

健康的な小麦色の肌が宙を舞う。

彼女の種族、アマゾネス特有の踊り子のようなエキゾチックな衣装は露出が多い。上半身には姉と違って薄い胸を覆う布一枚に腰には長いパレオ。小麦色の肌と合い重なって扇情的でしなやかな肢体が惜しみなくさらされる。

黒いその髪もまた宙で踊る。

快活さを惜しみなく表出させた、向日葵のような表情。

しかし――その行動はそんな可愛いものではない。

ほんの少し見とれていただけで、前髪を拳がかする。

それだけで先端がサクッと削れ、顔面に当たっていたらただでは済まない威力だと分かる。それ以前に空を切る音が聞こえている時点でその威力は推して知るべし。そんな拳が止まることなく振るわれ続ける。

おまけに腕よりも筋力があるとされる脚まで振るわれる。

「どうして、こうなった……！」

「それはマダオがマダオだからだよ！」
ちょっと反論が出来なかった。
マダオの部分ね、マダオの部分……反論できないの。
「でも、ちゃんとロキとの契約でＯＫもらってるんだぜ？」
「ロキがお酒が全部悪いって言ってた！」
「だからってなかったことにはならないんだからな⁉」
今や騒ぎの中心となっている主神、ロキに視線を向ければテヘペロと口にしながら舌を出す。後で契約の時に差し出したお酒の代金を返してもらおうかと思いながら、シャレにならない威力の拳を一瞬のうちに三度と回避する。
一度距離を取ろうと地面を蹴れば彼女――ティオナ・ヒリュテは嬉々として追従してくる。
勘弁してくれと最後に一度助けての視線を送ると、
「……」
ソワソワといかにも参戦したそうな、寧ろ今にも参戦しそうな一人の少女が。
普段のような蒼の軽装ではない、白を基調とした普段服に包まれた華奢な体にきめ細かく瑞々しい白い肌。性別問わず振り返らずにはいられない、エルフや女神にも引けを取らない繊細な顔立ち。風になびくサラリとした美しい金の髪。わくわくと光を宿す引きこまれるような金色の瞳。
しかし一本の銀色の剣を胸に抱えて今にも立ち上がって駆け出しそうなその姿が今は何より恐ろしい。
「あー、よそ見なんてしてるの？」
じゃあ、もうちょっと上げてもいいよねとにこやかに笑うティオナ。
何をと聞く暇もなく、ティオナが好戦的な笑みを浮かべる。
あ、これマジな奴だと冷や汗を流しながら、
「フィン！　フィーン！　死ぬよ、これ俺死んじゃうよ！」
良心である小人族の団長、フィンに助けを求める。
しかし彼は親指を立て、

「ンー、大丈夫じゃないかな。今は昼、君の大好きな時間だろう。僕の親指も何も言ってない」
「親指が何か言ってたらそれこそ俺の命日だから！　ちょ、あっぶな!?」
「うっそ、当たったと思ったのに!?　ええーい！　ティオネ、大双牙(ウルガ)よこして！」
　姉であるティオネへと声を投げかける。
「アンタ、マダオのこと殺す気？」
　すると姉であるティオネは妹とは違う豊満な胸の下で腕を組むと溜息をつく。
　同じような踊り子の服を身に纏うティオネに豊満な胸と、男の視線を掴むには申し分ない。何が言いたいのかと言えば、溢れんとばかりに持ち上げられ、更に溜息によりふよんと揺れるそんな胸に見とれた男は俺だけではないということ。
　だからそんな目でコッチ見ないで！
「……ティオナ、やっちゃいなさい」
　そう言いながら自分の丈程ある大双刃(ウルガ)を軽々と持ち上げ、挙句の果てに放り投げる。
　数ある武器の中でも戦鎚や大剣よりも更に巨大な、超大型に分類するその獲物を見目麗しい少女が軽々と扱うその姿は異様の一言につきる。そして妹であるティオナもまたそれを軽々と受け取り手足のようにその双頭を振り回す。風が頬をなぐ。
「なーにティオネのこと見てんのさ！　目の前にあたしがいるでしょーがッ！」
「見てる見てる超見てる！　この場にいる誰よりもめっちゃ見てる！
　――見てないと死んじゃうから！」
　すると振り回される大双刃(ウルガ)が勢いを増した。
　何さ、望まれたがままのことを言ったのになにさ！
「最後の一言が余計やったって、あのマダオ分かっとんのかな」
「マダオのことだ、きっと無自覚だろう。それよりもアイズ、流石に自重してやれ。でないと流石にマダオが死にかねん」

遠くで主神とエルフの王女が言葉を交わしている。
どうやらエルフの王女、リヴェリアは今にも突撃してきそうな金色の少女アイズをなだめてくれているようだ。後でリヴェリアにはお礼をしなければいけない。主に俺の命を救ってくれた件に関して。ただこの場を収めてくれたら秘蔵の物も出すので助けてほしい。
そんな意を込めてリヴェリアに視線を送るが気づいた彼女は額に手を当て溜息を吐く。
そして――――とてつもない殺気が背中を突き刺す。
「まだ余裕があるなんて……本気でいっくよー」
ティオナの纏う空気が変わる。
それはまさに、深層に挑む時の覇気そのもの。
流石のギャラリーもザワリと揺れ騒ぎ、俺の心も絶叫を上げる。
そもそもなんでこうなったんだっけ。あまりに遠征についていかないからたまにはといって連れ出されて、面白そうとついてきた主神に追随して人が増えて、訓練場の一角があっという間にこの様になって。
体を動かさないとなまるよーというティオナの一撃からことが始まったのだった。
え、ちょっと意味わかんない。
そもそも『遠征よりも優先すべきことがあった場合それを無条件で優先する』という俺とロキの契約があるから、遠征に行かないのであってサボってるわけじゃないのよ？　ちょっと体調が悪かったり、優先すべきことが起こるんじゃないかなって予感があったからベッドで待機してるだけで。
勿論、団長であるフィンと主神であるロキに言われれば遠征には参加する。
俺が行かない時はそこまで俺が必要とされていない時だ。
……普通はそれでも熟練度上げるために行くんだろうけど。
「ティオナ、Ｌｖ５だよな？」
その本気の一撃とはどれほどのものか。
知っているだけに恐ろしい……五体満足でいられるだろうか、俺。

ちらりと徐々に隠れていきそうな空に浮かぶ太陽を見て、ゲンナリと肩を落とす。

そして覚悟を決めて、おとなしくその身を前に投げ出した――――。

ここは世界で唯一ダンジョンが存在する都市――オラリオ。

ヒューマン含め様々な種族が生活を営む世界一熱い都市。

そしてダンジョンに挑み生計を立てる冒険者たち。

何時の頃からか天界より降りてきた神々の恩恵を受けた彼らは、神により力を授かる変わりに『ファミリア』というコミュニティーに所属する。神は力を与え、冒険者はその力でダンジョンに挑み冒険をし金を稼いで神を養う。ｗｉｎｗｉｎの関係というやつだ。

とはいえ、神にしてみればゲームのようなものなのだという。

それを気にしないのは、それだけ神の恩恵の効果が絶大だということだ。どれだけ弱かろうと、どれだけ臆病者であろうとその恩恵を受けたものは最低レベルの魔物であれば自力で倒せてしまうだけの力を得ることができる。

『神の恩恵（ファルナ）』

神の恩恵を細かくパラメータ化し数値で表した基本アビリティ、発展アビリティ、魔法、スキル、そして総合的な階位を示すＬｖから構成される『ステイタス』というものがある。これは『神の恩恵（ファルナ）』そのものだ。

神が扱う『神聖文字（ヒエログリフ）』を神自身の血を媒介にして背に刻むことで冒険者の能力は飛躍的に向上し、その数値こそがステイタスなのである。

また『経験値』というものがあり、本人が体験したありとあらゆる経験の値のことである。この数値は本来不可視であるものの、超越の存在である神であればそれを手に取り利用することも可能だ。己の歩んだ道、歴史の中から神は出来事を引き抜いて成長の糧とすること

ができる。
簡単に言えば経験したこと、起こった出来事の質と量の値が『経験値』なのである。
これを神は手に取り、ステイタスの数値を向上させる。
背にある『神聖文字（ヒエログリフ）』に数値を付け加え、時にその評価を押し上げる。
ちなみに基本アビリティは『力』『耐久』『器用』『俊敏』『魔力』の五つで、頂点をSとしてA～Iまでの十段階で示される。当然のことだが、これがSに近ければ近いほど当人の能力は強化されていく。
0～99がI、100～199がHのように規定され、その日得た経験値を『神聖文字（ヒエログリフ）』に加算することでこの熟練度は最大999まで上昇するとされている。これまた当然だが数値が高くなっていくにつれて伸びも悪くなり能力値が上がりにくくなると言う。
発展アビリティに関しては割愛。特性とでも言っておく。
魔法――も今は関係ないので割愛。
スキルは……固有能力。
それよりも今はLvについてである。
よくあるRPGならばたかが此れしき1Lv差と挑んでもおかしくはないのだが、ここでは勝手が大きく違う。このLvだがたった一つ上がるだけで基本アビリティの補正以上の強化がなされるのだ……とはリヴェリアの談。
実際、Lv1とLv2の差は非常に大きい。
あちらの攻撃は致死の威力を持っているのに、此方の攻撃がまるで待ち針かと思えるほどに通らない。その動きが捉えられないのに対して、格が上の彼らはノロマとばかりに縦横無尽に表れては姿を消す。誇張してる部分もあれど、Lvが上がれば上がるほどそうなっていくのである。
最早目では捉えきれない程の差。
Lvが上がるとは、器が更に上の段階へ進化すること。とある神は心身の進化といい、より神に器（じぶんたち）が近づいていくと言った。
そしてそんなLvだからこそ、自分の限界を突破するような特別な

経験を積む必要がある。

それを四度繰り返し、成長した少女の――――全力。

対してＬｖ４と５の間を行くような中途半端な俺の――――逃げ足。

「ちょ、無理無理無理！　まともな武器もないのに防げるかっ！」

流石に止めようと動き出すフィンたちとは裏腹に、ロキはニヤリと笑う。

何をたくらんでいると声に出す余裕は無く、ティオナから逃れようと距離を取り続ける。

「なー、マダオ。ウチも鬼やない、助けを求めてる子を見て見捨てようとは思ってへん。だから、な？」

「対価をよこせと、この鬼畜生！　鬼じゃないか、ここぞとばかりに絞り取る気か?!」

「ええやん！　どうせまだ持ってるんやろ、あの黄金の酒を！　ちょびっと、ちょびっとでええねん！」

「あれはもう生産されてない最高級の酒だぞ！　俺だってくすねげほんげほん――あれしか持ってないんだよ！」

「だからよそ見すなってのに――――！」

「「ギャー!!」」

ティオナに吹き飛ばされロキに激突し宙を舞う。

そして思う。

――――どうしてここに来ちゃったかな、と。

一話

両肩に伸し掛かるのは莫大な荷物。

それこそ数日後に予定されている遠征の必要物資を、約二人分担いでいる。これは当人たちが使う個人のものであり、ロキ・ファミリアの遠征隊そのものが使用する全体の物資はまた別の眷属たちが買い足している最中である。

ちなみに俺は次の遠征には参加しない予定である。

だというのにこうして買い出しの荷物持ちをさせられてるのは、先日のティオナとの模擬戦の一撃を勘弁してもらうための対価である。迫りくる破砕の一撃を前に、明日の荷物持ちを手伝うからと拝み倒して何とか踏みとどまってもらったのである。

ちなみにもう一つの荷物は彼女の姉、ティオネのものである。本来なら彼女もこの場にいたはずなのだが、やたら嬉しそうな顔をして団長であるフィンの命を受けて彼と共にどこかへと姿を消した。故にその分も俺が持っている。別にそれはいいのだが、団長がお持ち帰りされないかだけが不安である。

彼女の姉（大）は団長（小人族）にお熱なのである。

「えーと、次は……【ディアンケヒト・ファミリア】のところで、使っちゃったポーションの補充っと」

快活な笑顔を浮かべご機嫌な彼女を横に、俺はどれだけ増えるのだろうと荷物の山を見て戦慄する。

道中に立ち寄ったアマゾネスの被服店なんて今回の遠征に必要ないのは分かり切っていることである。この調子だともう二、三倍に増え俺の体を埋め尽くすだろう。荷物持ちがいる今日、ここぞとばかりに日常品まで買い込んでいるふしがあるのは、ただの勘違いまたは見間違いか。

「ティオナさんティオナさん、【ディアンケヒト・ファミリア】はこっちを右ですが」
「いいじゃん、寄り道くらい！　あ、じゃが丸くん売ってる。アイズに買っていってあげよー」
じゃが丸くん一つ！
視線を引き付けるようなその笑みはとてもかわいらしいのだが、出店の店主は顔を青ざめた。
わなわなと指を震わせ、俺は悟る。
――――いつものやつだ、と。
「ななな、【大切断（アマゾン）】だとぉ!?」
「ちょっとー！　その驚き方はひどくない!?」
「色々とすごい噂話が出回ってるからなー。あ、店主、俺にもじゃが丸くんの五個入りを一袋！」

「もー、失礼しちゃうよね。人の二つ名で悲鳴あげるとか」
「やること為すこと、二つ名にふさわしいからな」
アツアツのじゃが丸くんを頬張りながら、拗ねるように足を抱えて座り込むティオナを見る。
彼女の戦い方は見事に二つ名として現れており巨大な大双刃を軽々と振るい、踊るように対峙したモンスターを真っ二つにする。だからこそ神々は彼女に【大切断（アマゾン）】の二つ名を授けたのだろう。ただ、何故読み方がアマゾンなのか分からないが。アマゾネスだから？
「やること為すことって、普通にモンスター倒してるだけだよ」
「その倒し方が大胆なのと、手持ちの武器をあっけなく真っ二つにするから……」
大双刃を軽々と振るう彼女がその身に秘める力は、自分よりもはるかに大きい鉄の塊を軽々と持ち上げる。

同時にそれだけの力が武器にもかかるため、彼女が使用する武器の寿命は非常に短いのである。彼女の姿が鍛冶場に現れると鍛冶師たちは震えだし、壊し屋（クラッシャー）が来たと騒ぎだす程に、彼らの努力の塊をあっけなく砕く。

そんな噂がねじ曲がったりして伝わった結果、一部の住人たちからはこんな反応が返ってくる。

しかし先程のはちょっと違う。

恐らくはティオナが男である俺と二人で歩いていたことに驚いたのだろう。

【大切断（アマゾン）】に『男』だとお!?　的な。十分失礼だが。

言ったら俺の命が危ないので黙っているけど。

「気にするお年頃なのかねぇ……」

「マダオ、マダオがあたしのことどんな風にみてたのか分かったよ……ちょっと運動する？」

「俺が一方的に疲労するからやめとく。それよりじゃが丸くんが冷える前に買い物終わらせよう。後は【ディアンケヒト・ファミリア】でポーション類を買い足すだけなんだろ？」

「そっか、冷えちゃうか。それじゃ早いとこ買い物終わらせちゃおっか」

そう言いながらティオナはほっと勢いよく立ち上がる。

腰に巻かれたパレオがひるがえり、スレンダーな小麦色の足がちらりと見える。

「眼福かな……」

「あ、また女の人でも見てたの？　ウチに帰れば美人がいっぱいじゃん」

「美人ってもなー。一人は団長にゾッコンで、ヘタに肌見たら殺されるし。リヴェリアはこう、なんか違うし。アイズとレフィーヤなんてほとんど妹みたいなもんだし」

「ねえねえ、あたしが入ってなくない？　ねぇ！」

「あー、はいはい可愛い可愛い」

「怒るよ、あたし本気で怒るよ？　どうせあたしはスレンダーだぁ！」

「別に身体的特徴貶してなくない!?　被害妄想の類だぞそれはっ！」
ギャアギャアと言い争いながら、時には物理の拳が俺を襲う。
そんな風にいつも通りの道を歩いているとふとティオナの口数が減る。
「ねー、本当に今回の遠征、参加しないの？」
ぽつりと呟き、足を止める。
そんなティオナに合わせて止まれば彼女は振り返り俺を見ていた。
「今回の遠征は５０階層越えだろ。俺じゃあ足手まといだ」
「……レフィーヤだってＬｖ３だけど十分通用するよ」
「魔法使いだからな。俺には魔法は使えない」
「あたしと十分にやり合えたじゃん。アレ見れば誰もマダオに文句なんて言わないよ」
まさか昨日のはその為に、という考えが頭をよぎる。
俺は遠征への参加が自由で時には参加しないにも関わらずロキ・ファミリアの中核に籍を置いている。勿論、遠征に出ない代わりにその分だけの対価であったり物品を持ち帰ったりはしているが、中核をなすにふさわしい実力があるのかと懐疑的な視線は確かに存在する。
遠征に出ていないのに、大したＬｖじゃないくせに。
口にこそ出されることは無いが、そんな視線があることは誰もが知るところ。
だからこそ、昨日のティオナは、
「わざわざ大双牙（ウルガ）まで持ち出したのは……」
「途中で熱が入っちゃって、マジになっちゃったけどさー。でもでも、その前までは皆が見てたはず！」
そう言って少し照れたように頬をかく。
俺の為を思っての行動だったことに軽く感動しながら、その後の臨死体験一歩手前のロキとの空中散歩さえなければと事を悔やむ。
「確かに、皆みてたな」
「そうだよ、皆みてた！　だからさ……」
「だが断る！」
「なんでさー！」

やらなきゃいけないことがあるのだ。
明確でなくとも、理由が分からなくとも、それの善悪さえ分からなくとも。
やらなくてはいけないことを為さなければ、俺が呼ばれた意味がない。
何より、歩みを止めた男と、歩み続ける者たちを一緒くたにするべきじゃない。
「俺はマダオですんで」
「マジでダメな大人！」
いつの間にか前に進んでいた俺の背中越しに罵倒が聞こえる。
それでいいんだと一人笑いながら、【ディアンケヒト・ファミリア】を目指して角を曲がった。

マダオ――本名が分からないその男の強さを、ティオナは知っている。
何を隠そう【剣姫】と呼ばれるアイズが幼いころ、フィンやリヴェリアと共に戦い方を教えていたのはあのマダオなのだ。フィンによりダンジョンにおいての動き方、リヴェリアにより彼女の持つ『魔法』の使い方を、剣の使い方を教えていた彼女の両親の後を引き継ぐようにマダオが剣を教えたのだという。
そしてティオナにティオネ、ベートたちもまたマダオという男の手でダンジョンの中での戦い方と武器の扱い方を叩きこまれたのだ。それぞれ使う獲物が違う各員に対し、まるで自分が扱っていたかのように自在に操り『技』を見せた。
本人曰く、昔の知人の動きだそうで八割も再現できていないのだという。
ソロ活動を好み遠征に参加することは極稀な、幹部としての仕事を為さないダメな大人。これがロキ・ファミリアの八割がマダオに抱く印象。事実ではあるのだが、その裏では遠征時と同等かそれ以上の収入を得てくることがあるのを知っているのは極僅かである。

対してマダオという人間を知っている者たちからの印象は、食えない男。力は十二分にある癖にそれを誇示することもなく、名を知らしめるなどの野心もなく、何を目的に冒険者となったのかが分からない不思議な男。唯一彼の目的を知るのは――主神のみ。

ティオナはかつての光景が忘れられない。

数多のモンスターの前に立ち、後ろの自分たちを守るかのように剣を振るうその姿が。明らかに格が上で即撤退を視野に入れるべき相手に、怖気づくことなく前に進み目もくらむような光と共にそれらをすべて切り捨てた。

どんな困難にも立ち向かい、それを打破するその姿。

まるでかつての自分が憧れた『英雄』のような姿。

単刀直入にそれを伝えればマダオはらしくもない笑みを浮かべて、俺みたいにはなるなよと寂しげにそう言った。その時の笑みに含まれた感情は何なのか、誰にでも真っ直ぐぶち当たるティオナですら、それを聞くことはできなかった。

『――――分かった。マダオみたいなダメな大人にはならないよ』

『――――何だろ、そう言われると切なくなってくる』

その時の会話は今でも覚えている。

せめてもう一度、マダオと共にダンジョンに潜りたい。

今の自分がどれだけ戦えるようになったのかを見てもらいたい。

マダオはああだが、それでも唯一の師と呼べる人なのだから。

「どーしたら連れてけるのかな。そういえば、あたしたちが遠征に行ってる間、マダオって何をしてるんだろ」

マダオがしっかりと報酬らしきものを持って帰ってくるのは知っている。

しかしその過程で何があったのかなど、何をしていたのかなどの詳細をティオナは知らない。もしかすればティオナどころかアイズ、ティオネ、ベート、レフィーヤも。知っているとすればそれは最古参であるフィンやリヴェリア、ドワーフのガレスくらいなものかもしれない。

そしてふと、マダオっていつからロキ・ファミリアにいるんだろう

という疑問が浮かび上がった。
最古参と上げられるとき、そこにマダオは入っていない。
「分かんないことだらけだよねー、マダオのくせに」
昔からいて、でも最古参じゃなくて、色んな武器を使えて、色んな武器を使う知人がいて、実は十分強いくせして冒険はせず、よくわからない依頼を受けて大量の報酬抱えて帰ってきて、何か絶対になさなければいけないような目的があって。
「あー、頭こんがらがってきた！　やめやめ、あたしにはわかんないよ」
そんなことより体を動かした方が良い。
猫かぶりの姉だって、実のところ面倒になったら実力行使に移るのだから。
「取りあえずぶつかって、聞いて、ダメならまたぶつかって」
最悪手を引っ張ってダンジョンに連れ込めばいいのだ。
アイズだって昨日の様子から見て取れるようにマダオとの訓練をしたがっていたし、ティオネだって呆れた顔の裏では握りこぶしを作ってあの場に飛び出したそうだった。ベートもまた好戦的な笑みを浮かべて、今にも襲い掛かりそうだった。
恐らくアイズがリヴェリアに協力を求めれば得られるし、フィンも強引な姉に任せればいける。ガレスは楽しそうな催しということで豪快に笑って参加してくれそうな気がする。そしてアイズとリヴェリアがくるとなればレフィーヤも当然ついてくる。
最早、マダオに味方はいない。
酒につられたロキが介入してこない限り。
「……皆でちょっとづつお金を出し合って、ちょっといいお酒を買って先にお酒を渡しちゃえば無碍には」
「……来ないから戻ってきてみれば、何を釣るつもりだ何を」
「あてっ」
コツンと頭に手刀が振り下ろされる。
目の端に涙を浮かべて前を見れば荷物をどこにおいてきたのか身軽そうなマダオがいた。

「あれ、荷物どうしたの？」
「【ディアンケヒト・ファミリア】でちょっと預かってもらってる。まったく、早く行くぞ」
そう言ってマダオが先を歩く。
しかし先程と違いペースは遅く、ちらりと後ろを確認している辺り過保護である。
それがなんだかおかしくて、
「あたしをおぶれ――――！」
「ちょ、ティオナお前！　それはおんぶじゃなく肩車だっ！　でも畜生、喜んでるじぶんが恨めしいッ」
「ギャー！　ちょっとエッチ、太ももも触るなー！」
「お前が揺らすからだ！　触られたくなきゃ揺らすなてか降りろ！」
騒がしく街を歩きながら、あの時の憧憬を思い浮かべた。

二話

アイズ・ヴァレンシュタインはかつての光景が忘れられない。

夢に見た黒い靄。割れた地面より這いよる漆黒の霧に包まれた光なき黒暗の世界。呆然とする自分に背を向けて歩き出す父の背中。残されたおびただしい数の武器、武器、武器。遠ざかる父の背中には追いつけず、いつの間にか目の前には母の背中があった。

闇が開いた罅に飲み込まれ、その姿を消す。

後に残るのは叫喚をまき散らす幼い自分と、前に突き刺さる一振りの剣。

朽ち果てたその剣を手に、前へ前へ走り出す。

今の自分の姿になっても、その果てへはたどり着けない。何もかもが呑み込まれて、闇以外の残るのは墓標のような武器たちと、朽ち果てた剣を抱く自分だけ。

怖い、暗い、寂しい。

全てが闇に飲まれていくその中で――――その全てを払う光があった。

どんな困難にぶち当たろうと、一度決めた以上引くことは無い。

一度交わした約束を守るためだけにその命を懸けて越えられるはずもない壁を、想いだけで乗り越えた。その姿は誰より気高く、誰よりも力強く、だからこそアイズはその光景に誰よりも憧れを抱いた。

遠征には出かけない、訓練も行わない、やる気に覇気など全く見られない普段とは想像もできない程かけ離れたその姿は、自分を含めた極僅かの人間しか知っていない。

それが誤解を生もうと彼は気にもしないしぶれることもない。彼が胸に抱くのはたった一つの願いであって、それを叶えるためだけにここにいる。きっと彼ならば誰かに縋ることもなく、その願いを叶えるためならばどこまでも突き進めるのだろう。

アイズはその隣に立つための、彼の願いを知る段階にすら至ってはいない。

「……もう、置いていかれたくない」

だからアイズは剣を振るう。

自らの悲願を達成するために、彼の隣に立つために。

先ず最初に始めるべきは、彼の名前を知ることだ。

明らかに偽名なその男の名は――――マダオと言った。

「おー、やっぱりここにいたか」

どこか気の抜けたようなその声に振り向けば、立っていたのは当人であった。

柔らかな金色の髪を持つその男は片手に何かの紙袋を持ち訓練所の端に立っている。

「マダオ……？」

「おう、マダオだな。ティオナの言ったとおり、今日も自分を鍛えてたんだな」

「うん。ステイタスの伸びが悪いから」

成程とマダオは頷くと、ガサガサと紙袋を揺らす。

その行動に何の意味があるのかと首を傾げると、その揺れた紙袋からはお腹を刺激するようないい匂いが漂ってきた。ジ、と視線をマダオに向ければマダオは正解とばかりに笑って紙袋の中からアイズの好物であるじゃが丸くんを取り出した。

剣を仕舞い、ステイタスを駆使して水道へと移動し手を洗いまた戻る。

するとマダオはおかしそうにおなかを抱えながら、よくできましたと紙袋そのままをアイズへと渡した。

「……マダオは、食べないの」

「ん、俺はもうティオナと一緒に街中で食べてきたからな。それはアイズの分……あ、ティオネとレフィーヤの分忘れてた」

その中にベート・ローガは入っていない。

「ティオナ、と？」

「おう、遠征の買い出しの手伝いでなー。日用品の買い足しまで付き

合わされた」

何故、自分だけ置いていかれたのか。

そんな思いが胸に浮かぶが、訓練していたのは自分だと結論付ける。

と、ここでじゃが丸くんの入った紙袋があったかいことに気づいた。

「出来立て、ホヤホヤ？」

しかし、じゃが丸くんを買ってきたのは街中であったはず。幾ら近くに出店が出ていたとしても、できたてホヤホヤのこの温度を保つことは不可能である。それは何度も、出来立てをそのままホームに持って帰ろうと挑んだアイズが良く知っている。

「出来立てって、温度でわかんの？」

「じゃが丸くんの事なら、マダオには負けない」

グ、人知れず胸の前で拳を握る。

マダオの顔が若干引きつっているようだったがいつものことかと呟くと笑って流した。

そんなことよりも、どうやったらこの出来立ての温度を維持したままこのホームまで戻ってこれるのかを知りたかったアイズは目に光を灯してマダオへと詰め寄る。

そんなことよりも、どうやったらこの出来立ての温度を維持したままこのホームまで戻ってこられるのかを知りたかったアイズは目に光を灯してマダオへと詰め寄る。

「なら、保温方法に関してだけなら俺の勝ちだな」

「……認めざるを得ない。だから」

そういってじゃが丸くんを抱きしめるアイズを見て、その次の言葉を察したマダオは手を平を宙に向けて差し出す。次にマダオが小声で『展開（オープン）せよ』と呟くと、手のひらがバチリと青い放電を起こす。その光景を、アイズは知っていた。

「……魔法？」

「魔法……うーん、まぁ魔法かな。取りあえず、コレで紙袋の中だけ温度を上げて保存してきた」

ス、とアイズがその手の上に自分の手を重ねれば、心地よい熱が感じられる。

突然のアイズの行動にキョトンと首を傾げたマダオは慌ててキョロキョロと辺りを見回す。その光景にアイズが首を傾げていると、マダオは「セーフ、か？」と呟いて手を放す。

「――――あ」

その名残惜しさに声をもらせば、マダオはどこか照れくさそうに頬をかく。

小悪魔ですねぇアイズさん、そう呟いたマダオは目を逸らしながらもう一度手を差し出した。いつもと違うその様子に、どこか距離感が近づいたような気がしながらアイズはもう一度その心地よい熱へと手を預けた。

名前を聞くことを、すっかり忘れて。

すべての工程を終え、一人で塔の上へと昇っていく。

そこには我らが主神、ロキの部屋となっている。つまるところ、俺はロキに声をかけられてこの螺旋階段を上っているのである。道中、同じ眷属たちとすれ違うことは無かったので恐らくステイタスの更新も後回しにして俺を呼んでいる。

……嫌な予感しかしない。

しかしそれはきっと大事な話で、俺に、仲間たちに関連する重要なことなのだろう。

勝手に予想しておいて、外れてくれれば万々歳。

そんなことを考えていると、ロキの神室が現れる。

コンコンとノックをすれば、中からは入ってええよーと明朗な声が聞こえる。
「こんばんは、ロキ。呼ばれたから来たけど……酒は持ってないぞ！」
「第一声がそれかいな！　ウチのこと馬鹿にしすぎや！　……まぁええ、今回はその為に呼んだわけちゃうし。ま、そこに座り」
ロキに言われるがまま、材質の良いソファへと身を沈めればコトリと前にグラスが置かれた。
ほんの少し匂いを嗅げばやはりアルコールの匂い……お酒であった。
「ソーマんとこの失敗作や。ま、手間賃ってとこやな」
「……手間賃であの高い酒かー、最初からレートが高すぎないか？」
つまるところ、この後の話はそれ相応の物であるということ。
俺は一つ溜息をつきながらグイとグラスを傾ける。芳醇な香りが口に広がり、知らずの内に口角が吊り上がる。それでも俺が思い返すのは、かつてとある城で飲んだ黄金の酒。これが本当の酒かと驚愕した至高の酒である。その後色々あり殺し合いに発展し、その中で勝利品として獲得した黄金の壺。
それは今でも俺が所持し、中にはその酒が波打っている。
それと比べてしまえば……此方が劣る。
「それでも美味いんだけどさ」
「あの酒と比べたらあかん。神酒といい勝負かもしれへん品物や、アレは」
「……べた褒めされてもやらん。中身は限られてる――――はずだから」
あの酒の壺、中が見通せないのである。
口から覗き込んでも先に広がっているのは真っ暗な暗闇。
しかしひっくり返せばそこからともなく酒が落ちてくる。
しかしひっくり返せばどこからともなく酒が落ちてくる。
「ちぇー、ケチ！　ま、ええ。それよりも話があるんや」
「あのロキが酒を放り出して話、ねぇ……お腹痛くなってきたから帰ってもいい？」

「ええ訳ないやろ。ちなみに廊下には既にリヴェリアが待機しとる。逃げ出そうものならオカンにしばかれるで」
「ああ、我らが母上どのか……直に言ったら怒られるから内緒な。防音効いてるよな、この部屋」
バッチし、と笑うロキに安堵の溜息。
それにしても、逃走経路が塞がれていたか。すれ違わずとも、俺の後に登ってきたわけな。
まったくやってくれるね、悪戯神ロキ様は。
「さて、聞く姿勢も整ったみたいやし話を始めよか。その為にも先ず、マダオとウチとの契約を振り替えろか」
そう言ってロキは指を三つ立てる。
そして一つを折りながら、
「一つ、マダオをロキ・ファミリアに迎え入れ動きやすい立場へ。対してマダオはウチの主命があれば最優先事項が発生していない限り拒否権なく指示に従う。まぁここは他の眷属たちとも大体一緒やから気にせんでええ」
ロキは次に、もう一つ折る。
「二つ、マダオには遠征の拒否権を。対してマダオはそれに見合った対価を」
そして最後の一つ。
「三つめや。ウチが神会（デナトウス）などで手に入れた『精霊』の情報を優先的にマダオへ。マダオはその先で得た情報をウチに還元する」
「契約の確認をしてきたってことは、このどれかに引っかかるものがあったと」
「ちょっと違う。ウチの勘」
そう言ってロキは細まった目を開く。
普段とは違うその真剣な朱色の瞳は俺をまっすぐ捉えて離さない。
確実に今回のロキは本気で何かを感じており、眷属たちの身の安全を心配しているのがよくわかる。おまけに俺が優先すべき最優先事案が発生していないのも理解している。
「主命や、マダオ。次の遠征に参加して、ウチの勘が働く何かに状況を

見て対処せえ」
普段のおどけた、飄々とした姿は隠れ神としての存在感が部屋を満たす。
当然のことだが『神の力（アルカナム）』は解放されていない、にも関わらず頭をあげられない。
「おおせのままに、主神ロキ」
かつて何度とったか分からない騎士の礼で主命へと返す。
ロキの勘が働いたというのなら、きっと俺が知りたいことと関係してくるのだろう。
俺の目的の為にも、ロキの願いを叶えるためにも、仲間たちが一人でもかけることなく帰ってこれるように、全力を尽くそう。
「とはいえ、俺は一切道具の補給を行ってないし、遠征用に荷物も纏めてないんだが……」
「それだったら今ウチのアイズたん達がマダオの部屋に入って纏めてくれとるで」
「不法侵入！　それ不法侵入だから！　っていうか鍵かけてたのにどうやって!?」
「ウチが合いカギをもってないとでも……？」
「畜生俺のプライバシー！　って、アイズだけじゃないの、入ったの」
「一緒にティオナがおったで」
「ノオオオオォォォォォォォ！　俺の部屋が！　秘蔵のお宝がッ！」
かつてティオナたちが侵入してきた時のことが思い返される。
楽しそうに笑いながら俺の部屋を漁りつくし、俺が取っておいた取って置きのお宝たちを粉砕していくその姿。時に刻まれ、時に文字通り粉々にされ、最終的にそれら全てがゴミ袋の中へと姿を消した。
食べ物は後からやってきたロキたちの腹の中。
美味しかったと皆が笑う中、俺は一人気を落とすのだ。
美味しかったと皆が笑う中、俺は一人気を落とすのだ。
後でこっそり、ロキと酒を飲みながら食べようかと思っていたが、
「……ロキ、酒のつまみが減ったぞ」
「……嘘やろ？」

「絶品……だったのに」
「ウチまだ食べてないんやけど！　ちょ、まち、リヴェリア、あの子たち止めてきて！」
　バタンと扉を開けたロキが、神室の前に置いてあるイスに座っているリヴェリアへと声を投げかけた。
　するとリヴェリア、何かをほっそりとした指でつまんで口に含んだところだったのかピタリと固まっている。普段見られないそんな光景につい見とれながら、少しづつ顔が赤くなっていくリヴェリアを堪能する。
「ウチのオカンは可愛いなぁ。ねぇロキ」
「美人は何をしても絵になるな」
「誰がお母さんだ！　不躾にそうジロジロと此方を見るな」
　紅茶を一飲みしたリヴェリアはまったくと言って、何か思い出したかのように俺を見る。
　はてと何かと視線を返すとリヴェリアは、
「マダオ、ドライフルーツは美味だった。今度何か礼をしよう」
「……ティオナが持ってきた？」
「ああ。マダオからの差し入れだと言ってな」
「りょーかい、リヴェリアの口にあったのなら幸いだ。今度また作るよ」
　リヴェリアは何も知らないのだから悪くない。
　何か言いたそうなロキを連れて部屋へと戻る。
　パタンとドアが閉まるとロキが項垂れる。
「手遅れやったか……！」
「原因はロキだから」
　この調子だと壁棚の二重底はばれていないか。
　いやまて、ドライフルーツを隠していたのがその一つ上の段だったのだから、棚を徹底的に漁っている可能性もある。下手をすると引き出しの底の高さに違和感を覚えた誰かが、その二重底の存在に気づいてしまってもおかしくはない。
　あの中には俺秘蔵、最高のお宝がッ。

「不味い、ロリ巨乳神へスティア様のフィギュアが！」
「おいマダオその話詳しく話せやー！」

三話

耳をつんざくような咆哮。

山羊のような曲がった二本の角、首から上は膨れ上がったような馬の顔。荒い鼻息とギョロリと動く眼球が目の前に立っていた俺へと向けられる。

フォモールと言う名のモンスターは、その巨体を揺らして手に持つ鈍器としかいいようのないナニカを振り下ろす。

何時もなら前衛に出てモンスターを狩りまくるティオナにアイズがまったく出てこない。それどころかやけにワクワクした様子で俺の背中を押す。なに、俺に嬲り殺されろっていうの、挽肉になれと言うの。ここは地下で太陽が出てないから力出ないんだけど。光合成できないんだけど！

振り下ろされた鈍器を回り込むように避け、すれ違いざまに持ち手を切り裂く。ゴトンと音を立てて落ちる鈍器は無視して、怒りで血走った瞳を向けるフォモールに剣を走らせる。関節を狙ったそれは全て吸い込まれ、四肢を失った体が倒れ込む。トドメと剣を突き刺せば、魔石を残して灰へと変わった。

一息つく――間もなく、仲間をやられたフォモールが隊を取り囲んだ。

フォモールの群れに囲まれる中、何故か俺一人が最も敵が密集しているポイントの前である。

「ねぇフィン。なんでお前まで後ろに居るの？」

「ここで隊全体が疲労するのは避けたいからね。大丈夫、信用してるさ」

「爽やかに言われても……もうちょっと敵の層を薄くしてほしいなー」

「おしゃべりはそこまでだ――来るぞッ！」

リヴェリアの声に振り向けば、フォモールの群れが進撃を開始する。

フィンは各々の隊に指示を出し、敵の猛攻を受け止める。盾を構えそれらを防いだ者たちは、その威力からか地面を削りながら後ろへ押されていく。これで盾を持った前衛は行動できなくなるが、押しとどめられているフォモールも同様である。

「後衛組、攻撃続行！　片付けろ！」

故に待機していた攻撃組の火力が唸る。

ヒューマンに亜人の入り乱れる一団が迎え撃つ。

それを傍目に、目の前にいる群れへと視線を向ける。恐らく此方を手助けしてくれるような余裕はどこにもないだろうし、先程まで後ろで俺を押していたティオナもアイズも自らの武器を取ってこの戦場を駆け抜けている。

なれば、此方も全力で、死なない程度に頑張ろう。

かつての、死が前提の戦場と比べればまだマシというものだ。

愛剣を片手に一歩踏み込む。

数が多い以上確実に殺せると確信したものは殺し、少しでも確率が低くなったものはその四肢を切り落とし身動きを取れなくしてから殺す。中途半端に動ける瀕死の敵こそが何をしでかすか分からず恐ろしいのだ。

一、二、三、四と、群れの先が見通せるぐらいには数を減らした。

しかしよく見ればそのさらに先から先程倒した数以上の敵が押し寄せてくる。幾ら殺せど群れが完全に途切れてくれることは無く、圧倒的な数を以て俺たちの隊を飲み込もうと襲い掛かってくる。

欠けはしないが体力が失われていく俺たちに対し、大きく数が欠けるが欠けては生まれて五体満足体力満タンの敵。当然ながら持久戦となれば不利なのは俺たちで、かといって持久戦以外にこの状況を突破する方法もない。

見れば後ろの隊は下がりに下がり、組んでいた円が小さく楕円形になっていく。

楕円の先にいる俺は取り残されかねないと、周りに合わせて少しづ

つ下がる。
そんな中でティオナの声が聞こえる。
「リヴェリア～ッ、まだぁー!?」
円の中心、リヴェリアへと投げかけられる声に返す者はいない。
その当人は今、その美しい声で紡ぎ自らの魔法を形に成そうとしていた。その威力を知っている誰もがその完成を願い、痛む体を引きずって敵の進行を食い止める。まだか、まだかと焦燥が募る中、一匹のフォモールが仲間を巻き込みながら前衛の一角に食い込む。
振り下ろされる鈍器の威力は、ひときわ大きい体を持っていたフォモールに比例するような一撃。
此方もまた仲間を巻き込んで盾持ちが吹き飛ばされ、前衛の一角に穴が開く。
「――――『展開（オープン）せよ』！」
遊撃から援軍では間に合わない。判断は一瞬。
自らが持つ魔法のキーワードを呟き、同時に体に力がみなぎるのを感じ取る。目の前にいるフォモールの首を定めて、速く、鋭く、ただ一撃で沈めることだけを考えて振り抜く。当然ながら刃渡りは足りない。だからこっそり刀身を伸ばす。一撃で最大限の敵の首を斬り、単純にそれを繰り返す。
魔法のブーストにより速度は先ほどと比べ物にならない。
そして殲滅。
前衛を崩し進入したフォモールもいるが、金色の影が走り抜けていったから問題はないだろう。俺がやるべきことは崩れた前衛の代わりにソコを維持すること。ここまで来てリヴェリアの魔法が不発とか勘弁してほしい。
盾職の復帰と同時に、先程俺が殲滅した箇所に再出現したフォモールを狩りに戻る。
「堂々巡りだな。コッチは疲弊していく一方だし」
そんなことを呟くと、フォモールの群れの上で何かがクルクルと回っている。何かと目を凝らせばそれはフォモールの首で、有り得ない速度で綺麗な断面を持った生首が生産され打ち上げられていたの

である。間違いなくアイズだろう。
多くの者がその光景に見とれる中で莫大な魔力の高まりを感じる。
確信したのは、勝利。
同時に、フォモールも脅威を感じたのか驚くべき行動に出た。
『オオオオオオオオオオオオ！』
全てのフォモールが武器を、あの鈍器を振りかぶり――投擲した。
その全てが切り札であり完成した魔法円（マジックサークル）の中心にいたリヴェリアを狙っている。
「――――全員、跳ぶなよ！」
剣の柄を握りしめ、炉に火を灯す。
刃の周囲が熱で歪み、その刀身に光を宿す。
威力は制限しあの宙に浮いている武器のみを焼き尽くす！
「――――――！」
一閃。
同時に剣から放たれるその熱が、宙に浮くその武器全てを飲み込む。
そして光が宙から消え失せればそこには灰一つ残りはしない。威力の調整に成功したことに安堵しつつ、後ろのリヴェリアの魔法が放たれるのを感じた。
【レア・ラーヴァテイン】
無数の炎の円柱が遊撃に出ている者たちを避けて放たれる。
あまりにその強大な円柱は体の大きいフォモールを丸のみにして灰へと返す。モンスターの咆哮に変わり絶叫が響き渡る。
リヴェリアの広範囲殲滅魔法。五十を超えたであろうそのモンスターの大群はたった一発の魔法によって一掃された。散る火の粉と熱気に包まれながらファミリアの仲間たちは剣を降ろす。俺たちの、勝ちである。
俺たちがたどり着いたのは五十階層。
ダンジョンの中に存在するモンスターの発生しない安全階層であ

る。
　ファミリアの皆が遠征の山の一つを乗り越え、目の前の芳醇で香ばしい香りに羽目を外す。設置した野営地の真ん中に置かれた巨大な鍋を囲み、団員たちは腰を下ろして談話している。中身はダンジョン内で取れた木の実やハーブだが、携帯食と比べれば雲泥の差である。かくいう俺も木の実を数個確保してドライフルーツをもう一度作る予定である。
「それにしても、相変わらずアイズは食べないな」
　隣に座る少女に、スープの入った器を近づけるがぷいっと顔を逸らす。どうやらアイズは過剰な食事はコンディションに支障をきたすと信じているらしくいつもこの調子なのである。ちなみに反対側に座るティオナはアイズが飲まなかったスープの器を俺から奪いがっつりとワイルドにかぶりついている。
　その体のどこにはいるのかと思いつつ、気持ちのいい食いっぷりに少々見とれる。
　すると急に服が引っ張られ、何事かとそちらを向けば俺が自分用によそったスープを飲み干すアイズがいて、
「……飲んだ」
「……えっと、うん、えらいな？」
　何故か満足そうなアイズ。
　何だろうか、このよくわからなくも可愛らしい生き物は。
　なんだか餌付けをする気分でポーチの中から一つの袋を取り出す。
「簡単に言うと野菜から水分を飛ばしてサクサクにした、まぁおやつみたいなものかな」
　アイズはじゃが丸くんが好きだったので、なんとなくじゃがいものソレを選ぶ。
　薄くスライスされたポテトチップスではあるが油は使っていないのでヘルシーかつ素材の味が楽しめる。太陽の恵み、野菜や果物が大好きな俺が良く作る一品である。大抵は作って二日でロキの酒のつまみとなって消えてしまうが。
「ほれ」

つまんで差し出せば、少し逡巡するような様子を見せる。
そのまま様子を見てみるが食べる様子は見られないため反対側へとスライドしてみる。
「ティオナ、食べるか？」
「おっ、それはマダオの新商品か！　いっただきまーす」
俺の手ごと持っていきそうな勢いで、じゃがいものチップにかぶりつく。
柔らかい感覚が指に触れたかと思えばティオナは美味い！と言いながら味わっていた。その声に呼応するかのように、ワラワラとファミリアの団員たちが集まってきた。どうやら先日のドライフルーツで味を占めたらしい。ロキ、お前のツマミは無くなったぞ。
「ンー、素朴だけど美味しいね。同じものを食べたことがあるけど、甘みがある」
「ガハハハ、酒がないのが惜しいのう」
「エルフ好みの逸品だな。太陽の恵みか」
「リヴェリア正解。水分を飛ばす前に少し太陽にも当ててる。まぁ当てすぎるとカピカピになるものもあるから気を付けないといけないけど。そのイモとかは甘みが増してね。言っとくけど、俺の魔法フル活用している貴重品なんだからな？」
どうせ止めても無駄だろうと、袋を開けて皆々に差し入れる。
これは今度からドライフルーツにせよ秘密裏に作る必要がありそうだ。でないと俺の分もロキの分もあっけなく皆の腹に納まっていきそうだ。タチの悪いことに美味しそうに食べてくれる皆の姿に喜びを感じてしまっている時点で見つかっても上げないという選択肢はなくなっているのだ。
次々に消えていく野菜を見て、最後の一枚であったじゃがいものチップを手に取り食べようとしたところで――突き刺さるような視線を感じた。間違いなくアイズだなと確信しつつ隣を見れば、じっと俺の手に納まるじゃがいもチップを見ていた。
苦笑しながら差し出せばアイズは、
「……ん」

手に取るわけでもなく、そのまま俺の手から口に含む。
俺を含めた周りがポカンとする中ティオナだけがカラカラと笑い、レフィーヤから光のない目で見つめられる。ベートも不機嫌そうにそっぽを向くがその片手には野菜チップが見え、リヴェリアからはまるで母親のような温かい目を送られた。
「リヴェリアお母さん、レフィーヤが怖いです」
「誰がお母さんだ。レフィーヤも落ち着け、いつものことだろう」
「で、でもですねっ!?　ま、マダオさんなんかにアイズさんは渡しませんからっ！」
妙な対抗心を燃やしているレフィーヤ。
アイズを尊敬しているのは分かるのだがその言い方だとちょっと誤解を招きそうである。美しいエルフの少女と女神にも劣らぬ美しい少女の絡み合い。なんとも俺の知り合いが喜びそうな展開である。アレは恋愛対象両方だったし。
一騒ぎして幾分か落ち着いて、輪の外から野営地を眺める。
火を囲むように集まる人々の影が、摩耗しかけた記憶を刺激しかつての光景を思い返させる。一人を中心とし皆で火を囲む。一人もくもくと食事を続ける少女を眺めながら、皆と共にその日の戦果に喜びの声をあげる。守れたという実感を胸に、その日を過ごした懐かしい日々。
「守れたって意味では、同じかなあ」
違うのは敵そのもの。
このダンジョンの中であれば敵は基本的にモンスターだが、俺が守ろうとした国の敵は純粋に人であった。多くの敵を殺し国を守ったと誇っても、酔いがさめればやってくるのは人を殺したという実感である。気づいたころには俺は手遅れでどうしようもない人間になり果てていた。
「……マダオ？」
気づけばどこか心配そうなアイズの表情が目の前に。
感情の表現が乏しいアイズの表情が読めるようになったのは、日ごろの訓練のたまものか。どこか憧れていた人に似ていたアイズの表

情が気になって、訓練中に読み取れるように頑張って、今思えばバカみたいな話ではある。
それでも幼いにも関わらず表情の乏しいアイズが気になっていた。
まるでそんなところも、あの人に似ていた。
だからだろう、俺が柄にもなく気にするようになったのは。
『彼女』と似ているアイズを、『彼女』と同じにしてはいけないと思うようになるのにはそう時間はかからなかった。それだけの才能を持ち、それだけの力を持つアイズだからこそ俺は危惧を抱き、彼女との訓練を終わらせた。
『彼女』と似ていると言われた俺が教えることで、至ってしまわない様に。
「碌なことなんて、ないからな」
「……？」
首を傾げるアイズに苦笑し、頭をくしゃりと撫でる。
居心地が悪そうにでもどこか嬉しそうな表情と訴えるような視線に手を放す。
そして最後にトンと頭に手刀を落とす。今日の戦い、一人で無茶をした罰である。
「無茶するアイズの将来が心配です。手綱を引ける奴が現れればいいんだけどな」
「……!?」
抗議の視線を受けながら、俺は一人苦笑を浮かべる。
アイズと彼女を重ねてみてしまう、未練がましい自分に対して。

四話

冒険者依頼――クエスト。

その名の通り冒険者に対しての依頼、その総称のことを言う。

特殊な材料を必要としている生産系【ファミリア】や商人、迷宮都市を運営しているギルドなどダンジョンでしか取れない素材を求める人々が依頼主であり、その依頼を受注した冒険者は依頼を達成しその見返りとして報酬を得る。

そして俺たちの場合、懇意にしている医療系のファミリアである【ディアンケヒト・ファミリア】からのもので、内容は五十一階層に存在する『カドモスの泉』から要求された量の泉水を採取してくるというものである。

ちなみにカドモス――強竜（カドモス）は、特定の階層にしか現れない巨大な体躯と相応の力を持った階層主を除いた、現在確認されているモンスターの中で間違いなく最強とされる強敵であり、この強竜が湧き出る泉をその湧いた先から飲み干してしまうので量も取れない。おまけにその強さから、確実に倒してからでないと採取など碌にできないのである。

で、なんでそんなことを説明しているのかというと――暇だからである。

「リヴェリアー、暇ー」

今回の冒険者依頼は少々特殊、というよりも対象となる階層が特殊であった。珍しいことに『カドモスの泉』がある五十一階層は迷路のような形をとっており、小回りが利く少数精鋭が望ましい。だからこそ同時に二か所の『カドモスの泉』から泉水を取るために二つのパーティーが組まれた。

その中から俺は外れたのである。

一班にティオナ、ティオネ、アイズ、レフィーヤ。

二班にフィン、ガレス、ベート、ラウル。
ちなみにファミリアの中でも最高位の魔導士であるリヴェリアは魔法を使い消費した精神力を回復させるためにお留守番である。無論、第一級冒険者が留守にしている間の防衛も兼ねて。そしてついでと俺も留守を任されることとなった。
「私は今休憩中だ……そんなに暇だったのならラウルと代わってやればよかっただろう」
「いやいや、ラウルにもいい経験になるって。べ、別に見捨てたわけじゃないよ？　俺の名前が出るかとドキドキしてて、ラウルって単語が出て喜んでとかいないよ？　……でも正直に言えば第一班に選別されなくてよかったと思ってる」
「……確かに心配事の塊だが、本人たちの前で言ってやるなよ。お前の安否の為を思って言っている」
「ちょっと苛烈すぎやしないかな、あの子たち」
血まみれにされる俺の姿と仁王立ちする少女二人を幻視する。
戦闘狂であるティオナに、剣姫の他にその暴れっぷりから付けられた非公式の二つ名『戦姫』の名を持つアイズもまたティオナ同様の戦闘狂。そして普段はお淑やか風の猫を被る、年下風の団長に大恋慕中のティオネの本性は二人以上の苛烈さを持つ。ただ一人、アブノーマルっぽいだけのレフィーヤが不憫でならない。いや、アイズと一緒だからいいのか。
まぁレフィーヤもリヴェリアに師事を受け、いずれリヴェリアの後釜になる有能な魔導士だからこれまたいい経験だろう。
「大体の原因はお前にあるのだがな……言ってやったらどうだ」
「……俺がアイズたちとの訓練を止めた理由を？　それ言ったら、大体の事を話さないといけないだろ。いいんです、まるでダメな大人で。大人の威厳なんてない俺で」
「なら甘んじて受け入れろ。あの子たちは理由を求め、お前は与えないのだから仕方あるまい」
「本当にリヴェリアがお母さんに見えてきた。抱き付いてもいい？」
「私に焼かれた後、アイズ達により血祭りにあげられる覚悟があるの

なら……な」
「ふっふっふ、魔法が完成する前に抱き付いてやるぜい」
「妙なやる気を出すな、バカもの。私に焼かれずとも実行してしまえば血祭り以上の結末がお前を待っているぞ」
未遂で済んでも血祭りね、まぁ当然か。
クスクスと笑うリヴェリアを見て俺も苦笑を浮かべる。
「俺なんかに執着する意味なんてないのになー」
「お前になくともあの子たちにはあるのだろう」
「……歩くの止めちゃった俺に？」
「歩くのをやめてしまったお前でも、だ」
肩越しに自らの背中に視線を向ける。
今はロキの施錠（ロック）で【ステイタス】は浮かんでいないが、【ファミリア】の証がそこにある。
経験を得て成長する【ステイタス】だが――俺の【ステイタス】は随分昔から数値の上昇を見せない。それ以前の問題で俺は【ステイタス】更新の儀を行っていないのだから上がるものも上がらない。冒険しない、更新しない、俺は冒険者を名乗れない。俺は彼女たちを導くような立派な大人になんて成れやしない。
今を生きる冒険者を、名乗れはしない。
「お前は物事を難しく捉えすぎだ。簡単に考えればいい」
「難しいも何もそのまんまだよ。俺は冒険者を名乗れない。ただそれだけ」
「……まったく、あのアイズですら自分の欲に素直になれるようなってきたというのに」
「俺も欲には素直なんだけどなー」
そう言えばリヴェリアはやれやれと肩をすくめた。
呆れたようなその仕草に少しむくれつつ、目を閉じるリヴェリアの隣で同じように目を閉じた。
その数時間後に訪れる黄緑色の地獄など知らず。

アイズたちは跳ぶように五十階層と五十一階層をつなぐ傾斜面の岩壁を駆けていた。

というのも、『カドモスの泉』に泉水を取りに行った際新種と思わしき黄緑色の芋虫のようなモンスターと遭遇した。本来なら『カドモスの泉』の番人として立ちはだかる強竜（カドモス）は灰の山となり討たれた後。残されたのは灰の中に張った皮膜だけであった。

とはいえあの強竜（カドモス）を倒せるほどのパーティーは限られていて、この階層に遠征が被っていた【ファミリア】は存在していなかった。では誰がと訝しんだとき現れたのが黄緑色の体を持つ芋虫のようなモンスターであった。

このモンスターはアイズの班にも、フィンの班にも現れたらしく合流した際にはラウルが重傷を負っていた。フィンの説明も聞かず特攻したティオナも芋虫のモンスターに大双刃（ウルガ）を突き刺したところでその危険性に気づいた。

驚くべきことに引き抜いた大双刃（ウルガ）の先が消失していたのである。

敵は体内に何でも溶かしてしまう粘液を持っていた。

それを知らなかったラウルはそれを真っ先に喰らい重症を負ったのである。

結果的にアイズの特殊武装であり、不壊属性を持つデスペレートとレフィーヤの魔法で撃滅することに成功した。しかし問題はここからであった。あろうことかその新種のモンスターたちは五十階層を目指して上がり始めていたのだ。

確かに五十階層はモンスターが生まれ出ない。が、下から上がってくるという事例は聞いたことがない。誰もがあそこを安全階層と認識しているからこそ、この状況は非常に不味かった。誰もが油断したところに、体内に腐食液を持つモンスターなどタチが悪すぎる。慌てて攻撃した途端、倒れたモンスターと倒れる仲間の数が比例してしまう。

おまけに自ら爆発し広範囲に粘液を飛ばすのだから、こちらの方が

倒れる仲間が多いかもしれない。
　既に斜面には黄緑色の粘液が続いており、誰もが息をのむ。
　そして遂に斜面を抜け五十階層に到達すれば――――、
「――――キャンプが！」
　いち早くティオナが叫ぶ。
　その方向には黒煙が上がっており、確かにキャンプがあるはずの場所だ。
　一段と速度を上げて駆けつけてみれば、キャンプの下にある一枚岩にワラワラと芋虫のようなモンスターが這い寄っていた。見ればその上にはリヴェリア達がおり、彼女たちに向かって腐食液を吐き出していた。じゅうと溶けてなくなる盾を投げ捨てて腐食液を防いだ仲間たちが後退していく。
　そんななかでリヴェリアは指揮をすることもなく魔法を紡ぐ。
「リヴェリアが指揮取ってないよ!?」
　その事実にフィンも少しばかり驚いた表情を浮かべるが、すぐにそれは消え笑みが浮かぶ。
　失望するどころかどこか嬉しそうに、自らの士気が上がっていくように、理知的な瞳の奥に獰猛な光が宿る。普段とは違う想い人（フィン）の姿に身を悶えさせる姉を冷めた目で見つつティオナはその視線をいるはずの男を探すように左右させる。
　そして――――見つけた。
「矢が無くなったんなら弓使い（アーチャー）は後退。頼んどいた丸太は？」
「で、できてます！」
「抱えて投げろ。殺す必要はない、叩き落とせばこの場はしのげる」
　手本を見せるかのように丸太を担ぎ、ひょいと投げる。
　すると腐食液を受けてあっという間に形をなくすがその後ろに隠れるように存在していたもう一本の丸太がモンスターに激突。キャンプが存在している一枚岩に張り付いていた複数の敵を巻き込んで落ちていった。それを見た団員たちも複数人で交互に丸太を投げる。幸い、灰色の樹木ならば沢山ある。
「落とせなかったら一旦引いて、俺に報告。ぶった斬る」

いつになく頼りになりそうなマダオの姿がそこにある。
そしてあろうことかマダオは上手く落とせず這い上ってきたモンスターの前に立ち、剣を持つ。腐食液の存在を知っていながら、自らの相棒が失われる可能性など微塵も感じていないかの如きその姿が、そして一瞬のうちにモンスターのみを灰へと変えるその姿が焦燥に飲まれていた仲間たちの士気を上げる。
「ま、マダオがやる気になってる!?」
「喋ってる場合じゃないでしょ!? さっさといくわよ!」
姉の言葉に従って前を見れば既に皆が駆け出していた。
その中にいるアイズの目がいつになくやる気に満ちていて、負けられないと火が付いた。
走りながらフィンが、マダオの武器が壊れない理由を予測する。
「……マダオの武器は高熱を発する、特殊武装（スペリオルズ）。恐らく、腐食液が刀身を侵食する前に蒸発させられている。断面も焼き焦げるから腐食液がまき散らされることもない」
「おまけに腐食液に触れる時間も一瞬とくれば当然か。やれやれ、若僧には負けてられんのう」
「その通りだね。先ずはキャンプに向かって武器を確保する。武器が無事なアイズたちは遊撃を頼んだよ」
「ん……風よ」
コクリと頷くアイズを先頭にフィン達が駆け抜ける。
ティオナは自らの武器がないことに歯噛みしながらフィンたちの後を追いキャンプへ走る。前を走るアイズが風を纏った剣を振るい、飛び散る腐食液を風で押し流す。その道を走ってすぐフィン達はキャンプへと到達する。
それぞれが行動に移る中で、フィンを見つけたマダオがやってきた。
「お疲れさま、このまま続けるかい？」
「もうごめんだ。中間管理職なら現場で体を動かしたほうがマシだな。リヴェリアの魔法がもう少しで完成するから後は任せた」
そう言ってマダオは背を向けて走り去る。

何が彼を動かしたのか分からないが、結果的にプラスである。
おまけにマダオの姿を見たアイズにティオナ、他の団員達の士気まで上がったのだから言うことは無い。強いて言うことがあるとすれば、ちょっとアイズが張り切り過ぎていることか。真剣なマダオと共に戦えるのが嬉しいとばかりに駆け回る子供のような姿。やっていることは圧倒的速度と攻撃力による殲滅戦だが。
別の場所で戦うマダオは援軍の参戦に安堵の溜息をつき、目の前のモンスターを睨む。
「何だかなーこの感じ。気に入らない、本当に」
マダオの剣が景色を歪める。
莫大な熱を込めた一閃は斬った先から焼き焦がし、断面から腐食液が漏れだすことを防ぐ。
アイズが駆け回るその姿を視界に入れながらマダオは駆け出し、すれ違いざまに敵を切り捨てる。やがてアイズが合流し、どこか嬉しそうに見つめてくるその視線にマダオはたじろぎながら、照れ隠しのように背を預けた。
アイズのテンションが上がった。
速度も上がった。
同時にマダオのやる気が下がった。俺、必要ないんじゃないかな、と。
それでも襲い掛かってくる敵を切り捨て、キラリと光る石を見つける。拾っておくかと別の敵から石をえぐり取るように剣を回し石の周囲のみを斬る。瞬く間に灰へと還るその中から、魔石を手に取りその色にいぶかしむ。
そして同時に、莫大な魔力が吹き荒れるのを感じる。
リヴェリアの、詠唱していた魔導士たちの魔法が完成する。すぐさま範囲外に退避し、寄ってくるモンスターを強引に弾き飛ばし範囲内に叩き込む。
その直後、多種の攻撃魔法が雨のように降り注ぐ。氷、炎、雷、様々な色が入り混じり大きな炸裂音を響かせる。その着弾地にいたモンスターたちは体液を散らしながら灰へと還りあっというまにその数

を減らし半壊滅状態へと追いつめられた。
残るモンスターもあとわずか。
辺りのモンスターを始末し、頬をかく。
「この魔石……ロキの勘って当たるよな」
コロリと剣を持っていない方の手の内で転がる一つの魔石。
本来なら紫紺であるはずの魔石だが、マダオの手の中に転がるその魔石は極彩色の輝きを放っていた。

五話

誰もが勝利を確信するなか、アイズは自身の体が訴える疼痛にほんの少し顔を歪めた。アイズの魔法は風を纏い移動速度とともに攻撃力を上昇させる使い勝手のいい魔法だ。その反面アイズの技量とその威力に耐え切れず、纏わせた体や剣に大きな負担がかかってしまう。

しかし仲間の安否が掛かっていた上に、あのマダオがやる気を出していたのだから手加減する理由もない。久々に本気と取れるマダオと共に戦えたことに、仲間を守れたことに安堵し痛みを堪えていつも通りの表情を貫き通す。

「手こずらせやがって……キャンプに残ってたあいつ等、無事なんだろうな」

「あれ、ベート、リヴェリア達心配してるの？　めっずらしー！」

周りでティオナとベートが騒ぎ弛緩した空気の中、アイズは一人視線を彷徨わせてマダオを探す。何か理由があったわけではないが、視界に収めておきたかった。団員達が視界を横切る中で、その外れにマダオらしき男の姿を発見した。

痛む体を無視して歩きだせば、マダオの表情が見えてくる。

（……マダオ？）

どこか複雑そうな表情。

しかしその端には僅かながらに、

（――――喜んでる、の？）

恐らくその原因となるのは、マダオが見つめている手の中に納まっているナニカ。

放っておいてはいけない気がしたアイズは知らずの内に歩調を早める。そしていつの間にか駆け出し、あと少しでたどり着くというところでマダオがバッと顔を上げる。その瞳に宿っているのは驚愕と

焦燥。
　またもや珍しいその表情につられそちらを向けば、
「なぁにあれ……」
「――――！」
　何本もの木を重ねてへし折るような音が響いた。
　メキメキメキと言う音に続いて、木が倒れる音と共に振動が伝わる。
　終わったのではなかったのかと、アイズを含めた誰もがその方向を振り仰いだ。流石の【ロキ・ファミリア】、行動は早く異常事態だと察した彼らは武器を再装備し臨戦態勢を取り始める。
　音が続いてどれほどか、ようやくそれは姿を現す。
　６Ｍを越えようとする巨体がそこにはあった。
　先程のモンスターよりもさらに大きく、黄緑の体に扁平状の腕。芋虫型のモンスターと関連づきそうな姿は、全容の作りが異なっている。下半身は以前と変わらず、だが上半身にはなめらかな曲線を描いた人の上体を模している。
　顔こそないが、その細さは女性を思わせる。
「あの腹、バカみたいに溜め込んでるなビール腹め」
　マダオの呟きが聞こえていた。
　恐らくマダオが言っているのは上体の少し下にある異様なまでに膨れ上がったどす黒い腹部のことだろう。あんな巨体だ、芋虫型のモンスターの同種なら蓄えている腐食液の量も相当なものとなる。あれが破裂したなら、どうなるか。
　いつの間にかマダオが前に立っていた。
「……マダオ？」
「――――碌でもないな、まったく！」
　見れば女型のモンスターが扇のような腕を広げ、鱗粉を放った。
　マダオはいつの間にか剣を持ち、宙に向かって一閃。刀身すらも伸びた斬撃が鱗粉を刻み――――爆発した。空中で起きた爆発に連鎖し他の鱗粉までもが爆発。それを見た誰もがあの鱗粉の危険性を理解し、一歩後ろへと後ずさる。

「――――フィン！」
「総員、撤退だ」
マダオの呼び掛けに、フィンは一瞬で判断を下す。
その声に多くの団員が振り返る中、マダオは一歩踏み出していく。
「速やかにキャンプを破棄、最小限の物資を持ってこの場から離脱する。リヴェリア達にも伝えろ」
フィンに対し、ベートとティオナが反論する。彼らにも第一級冒険者としての矜持があり、迷宮都市最大派閥としての誇りがある。だからこそフィンもまた、討伐すること自体を諦めてはいなかった。アレが上に登ればどれだけの被害が出るか、簡単に想像がつくのだから。
「モンスターを始末し、被害を最小限に抑えるなら僕たちは邪魔だ」
そう言ってフィンが視線を向けたのは、忌々しそうに女体型のモンスターを睨むマダオ。
まさかとフィンに皆が視線を向ければ、彼はマダオへと近づいた。
「マダオ、頼めるね」
「まっかせなさーい……今回に限っては元々やるつもりだったしさ」
マダオの返事にフィンは笑い、彼の背中を叩いて背を向けた。
対するマダオは少しくすぐったそうに、それでも笑っていた。
「全員、早く撤退だ」
「で、でもマダオが置いてけぼりに！」
「……フィン、私も残る」
食い下がるティオナの横でアイズがちょこんと手を上げる。
フィンは少し黙考した後、マダオに視線を戻した。
「デスペレートとアイズの魔法なら、対抗できるかな……分かった、許可する」
「な、ならあたしもっ！」
「ティオナはダメだ。攻撃手段が残っていない――――二度も言わせるな」
フィンの声音にティオナは何も言えなくなる。
体躯こそ小柄であるものの放つ威圧感は暴君そのものであった。
ティオナは肩を落とし撤退の準備に入る。

最後まで粘ったレフィーヤもその後を追えば残るのはフィンのみ。
「アイズを頼んだよ、マダオ」
「アイズなら俺が見てる必要はないだろ……悪いな、我がままで残らせてもらって。でもあれ、俺の探し物に近いんじゃないかと思って」
「どおりでやる気に満ちていたわけだ。普段からこうだと、他の団員に示しがつくんだけどね？」
フィンとマダオの会話が理解できないアイズは一人首を傾げたが、何でもないと手を振るマダオが話を打ち切る。
「アイズが加わったことでパターンは二つ。トドメをアイズに任せて時間を稼ぐか、マダオがトドメを刺しアイズが時間を稼ぐか。前者か後者かによって撤退完了の合図を出すタイミングが変わる。二人で決めてほしい」
「なら俺が囮に――――――」
「私が、やる」
いつになく感情のこもったアイズの言葉に、フィンもマダオも動きを止める。
どうしたものかとマダオが苦笑を浮かべるが、時間がもったいないとフィンの一存で決定。
アイズが囮、トドメがマダオとなる。
「ここは俺がって言いたいけど、頑固モード入ってるしな」
「……頑固じゃない」
ぷいと顔を逸らすアイズにマダオが笑う。
「それじゃあ頼んだよ。マダオ、何番手を使うんだい？」
「被害は最小限にって団長の指示があったからな。一番手でいく」
「分かった。アイズ、マダオから撤退の指示があったらマダオの背後に移動すること。でないと巻き込まれかねない」
その言葉から、アイズはマダオが使おうとしている打倒の手段を理解する。
かつて見た背中、黄金の輝き。
アイズの体に芯がシビれるような感覚が走り抜ける。
今確かにアイズの心は昂っていた。

「それじゃあまた後で。……アイズ、よく見ておくといい。歩むのをやめた男の背中を。かつての姿を捨てて、まるでダメな大人になろうとするその馬鹿の背を」

その意味を理解しきることはできなかったが、走り去っていくフィンを見送りマダオへと視線を戻す。すると彼は、こんな情けない男の背中を見ておけってあの鬼畜め、と一人顔の上半分を手で覆って嘆いていた。

しかし振り切るように頭を振って、アイズへと向き直る。

「今の俺だと、トドメまでちょっと時間がかかる。それまで頼んだ、アイズ」

「――――――うん！・【目覚め(テンペスト)よ】」

それを合図に風の如く駆け出した。

召喚された風を纏い、アイズの愛剣が振り下ろされる。

それに反応するかの如く、女体型のモンスターがアイズを標的として上半身を向ける。顔がないと思われていたのっぺらぼうのような部分に横一列の亀裂が入り、グパと口のようなものが現れる。

その光景から次に起きるであろう行動を予測。

アイズは間を挟むことなくその場から大きく横に跳んだ。直後にじゅわりと言う音では生易しい轟音が鳴り響き地面をどろどろに溶かしていく。大きくえぐれた地面の中、腐食液は止まることなく溶かし続けついには一枚岩すらも貫通していった。

（マダオに向けさせるわけにはいかない……！）

フィン達の撤退時間もある。

自分を的としておびき寄せ、付かず離れずを維持するのが最優である。

腕が大きく振り下ろされる。すると最初に見た鱗粉より遥かに量の多い、おびただしい数の鱗粉が放たれた。光の天井が出来たかのように見えるソレがゆっくりと拡散し、アイズを上から包み込むように降り注ぐ。

流石に準備していたマダオも顔を歪める。どうみても周囲一帯を焦土にできる規模であり、マダオ自身は範囲外にいるものの範囲内に

いるアイズが心配である。
逃れられないと判断したアイズの行動は早い。
（避けられないと悟ったら、全力防御）
その為の訓練は積んでいた。
他でもないマダオとの訓練で。避けられる攻撃、避けられない攻撃を織り交ぜてくるその中で、判断する能力を鍛え上げたのだ。広範囲と分かれば判断するのはそう難しいものではなかった。
風を張り巡らせ壁とし、自らの体を丸める。
次いで爆発。
直撃ではないにせよ、衝撃は完全に防げるものではなかった。
煙に包まれる中、大きなものが動いたような風の動きが見えた。何が行われるのか理解したアイズは焼かれた肌の痛みを無視し、その場を緊急離脱。見れば煙を割ってあの巨体が姿を見せていた。振り抜かれそうであった腕は、あと少し判断が遅ければ振るわれていただろう。
後退し距離を取る。
時間稼ぎは始まったばかりであった。

その光景を見て歯噛みする。
最初は自分で逃げ回りながら力を蓄え消し飛ばそうと思っていたが、事情が変わった。当然、動かず力を蓄えられるならその倍の速度で切り札を発動させられることだろう。それでも剣の輝きは全盛期には遠く及ばない。
少女が全力を持って時間を稼いでくれていると言うのに、なんという醜態か。両の手で持った愛剣は柄が輝きその力を蓄えている。己の魔力を糧として起動する愛剣が、まだ足りないと唸りを上げる。かつてなら一瞬で使用できた相棒に、今の情けない自分を深く詫びる。
数々の戦場を越えて、変わることない輝きを放ってくれる相棒に対して自分はどうか。
今を生き全力で駆け回る美しい少女と比べて己はどうか。

「醜悪だっ」
きっとうっかりが得意な彼女が見れば辛辣な言葉が飛んでくるだろう。
小さな姫もきっと溜息をついて、呆れた視線を向けて来るに違いない。
俺の背中に憧れたとぬかす少年は、
「それでも、変わらないんだろうな」
馬鹿みたいに真っ直ぐ、でも歪んでいる少年。
彼はかつての俺の醜態を見たところで、何一つ変わらなかった。
「寧ろ、人間味があって良かったという始末だからなー」
二人そろって呆れられたものである。
そして今目の前にも、俺の背に憧れたとぽつりと漏らした少女がいる。
俺という人間の在り方のどこに憧れる要素があるのか、慕う要素があるのか理解できない。ただ必要だったから剣を振るって、必要だったから教えただけ。無論相手が心配だからという気持ちもあれど、憧れるほどのものではない。
憧れというのはもっと別のもの。
俺が見た『彼女』のような人こそが、憧れそのものだ。
「早くしろー早くしろー」
念じたところで何も変わりはしない。
アイズの奮闘に応えたいものの、想いと現実は一致しない。
走り続けるアイズにありったけの腐食液が飛んでいき、切り裂かれる。何度も撃ちだされる腐食液を斬っては捨て斬っては捨て、押し流そうと増量された腐食液すらも斬り捨てた。金色の少女の姿は依然としてそこにあり膝を屈してなどいない。
なら俺も落ち着くべきだろう。
これ以上醜態をさらしてなんになるのか。
「一撃で消し飛ばしてやる」
イメージを描く。
確実にヒットさせ、確実にあの巨体全体を最小最低限の力で包み込

み焼き払う。出来る限りチャージ時間を短くし、最低限の出力で巨体全体を覆うには今の場所では少し遠い。知り尽くした相棒の射程と現在の距離から、どれだけ前に進めばいいのかを算出し頭に叩き込む。

動く相手に合わせて詰める距離を逐一変えて、最後に振り切るイメージ。

一瞬たりとも逃しはしない。確実に息の根を止める。

アイズの奮闘に応えるために。

想いを現実にするために。

「もう少しで出番だ、頼むぞ相棒」

力強く剣を握る。

そして俺の声に応えるかのように剣の輝きが一瞬増した。

六話

爆発する鱗粉が周囲を覆う。
完全にアイズを覆うその鱗粉に逃げ場は無く、おまけに女型のモンスターは腐食液を吐きだそうと背を逸らしている。
終わらせるつもりか。
アイズはとっさに纏っていた風を解き、その風に乗せて周囲の鱗粉を吹き飛ばす。
吹き飛ばされた鱗粉はアイズを中心として球体のように広がり炸裂した。その爆発が中心にいるアイズへと届くことは無く、花火のように光を放ち消えていった。
これまでの戦いの中で鱗粉が爆発するまでにかかる時間を把握していたからこそできた芸当である。
驚いた女型のモンスターは腐食液の放出を止めてしまう。
この魔法の特徴こそ、フィンがアイズの残留を認めた理由の一つであった。
風を纏えば身体能力が向上し、風が腐食液を吹き飛ばす。風を放てば暴風となり周囲を巻き込み、鱗粉を遠くへと吹き飛ばす。マダオの『熱』とは違った、女型のモンスターの天敵とも呼べる。歴戦の冒険者であり【ファミリア】の団長であるフィンの読みに、間違いはなかった。
そして、ドンッと上空に閃光が打ち上げられる。
撤退完了の合図。
そして、フィンが予測した『マダオの準備完了時間』の知らせ。
見ればフィンの的確すぎる予測に引きつるような笑みを浮かべて、準備を終えているマダオがいる。
――見逃せない。

気が緩み疼痛が体を蝕む。
それでもと新たに風を纏い、高速でマダオの後ろへと着地。
モンスターを見ればマダオを認識し攻撃に移ろうとして――――
固まったように動きを止めた。
まるで恐れるように、恐怖にふるえた赤子のようにその身を震わせる。
――――圧倒的な光がそこに集っていた。
目を開けるのも難しいくらいの、眩い光だ。
集まっている膨大な魔力はリヴェリアが紡ぐ魔法をも凌ぎ、その威力は想像しがたいほどに強力なモノ。何よりアイズもマダオの奥の手なんて一度きりしかみたことがなく、おぼろげな記憶の一つ。それでもこの光だけは覚えている。
這い寄る暗闇を一掃する、温かい光。
自分が憧れ到達したい目標の一つ。
目の前にあるのはダメな大人の背ではなく、憧憬抱く英雄の背だ。
フィンの言う、止まった男の背を見て思う。
（止まっていてくれないと、追いつけない）
それでもいずれ、マダオが歩みを進める時がくる。
いや、進んでほしいと思う自分がいる。
止まっていてほしいが、進んでも欲しい。
ごちゃごちゃな自分の中の想いに翻弄されながら、今は目の前の背に視線を向ける。
「――――目、閉じてろよ」
「……ううん、閉じないよ」
「……眩しいだけだぞ？」
マダオの呆れたような声。
知っている。
その剣から放たれる光が眩しいのも、その担い手であるマダオが眩しく思えるのも。
どうしてマダオが訓練に付き合ってくれていたあの時から、ああも変わってしまったのかアイズは知らない。

それでも根っこが変わっていないのは、皆が知っている。
「さっさと帰ろう。レフィーヤにどやされる」
マダオはそう言って前へと進んでいく。
両の手に輝く一本の剣を持ちながら、振り抜きの構えを取る。
そして、纏う雰囲気が一変する。
「邪魔だ化け物」
研ぎ澄まされた剣のように。
慈悲もないその声にモンスターが後ずさる。
（……いつか、追いついて見せる）
そんなアイズの視線に気づかないマダオは、眼前の敵を完全に攻撃範囲内へと収めた。
もうモンスターに逃げ場は無く、今更モンスターが攻撃態勢を整えようと結果は変わらない。
「――――――……」
アイズにも聞こえない声で、マダオが呟く。
同時に剣が纏っていた光が臨界を越え――――広大なエリアを白く照らした。
それはモンスターも、アイズも同じことであり先にあるものが見渡せない程のまばゆい光。
そして次に響いたのは轟音。
一瞬だけ響いたその音は、一瞬で、一撃で敵を破砕したことを教えてくれた。
今だ目に光が残るアイズが目をこすりながら前を向けば、
「――――――！」
マダオの前方には、何一つ残ってはいなかった。
広がっていたはずの、灰色の樹木も全て。
後に残るのは更地になった寂しい大地だけだった。
「し、死ぬ……」

全ての方が着いた後、【ロキ・ファミリア】の遠征は中止となった。
理由は簡単で腐食液を持つモンスターとの戦闘であらゆる物資が不足してしまったからである。食べ物などであれば現地調達も可能であったが、冒険者たちが振るう武器はそうはいかない。天然武器というモンスターが使用する武器もあるにはあるが、強度も足りないし使い慣れていない武器を使っていて生き残れるほど深層は甘くない。
結果、団長であるフィンが遠征の終了を決定したのである。
そして先の戦いの功労者たるマダオは――――四肢をピクリとも動かさずにティオナに担がれていた。
「ティ、ティオナさん、もうちょっと丁寧にお願いします」
「あ、段差だ。よっと」
「だからもうちょっと優しく丁寧にふぐぅ!?」
段差をひょいと降りた反動で、ティオナの肩がマダオに食い込み苦悶の声を上げる。
これというのも普段使用しない奥の手を使用し、精神疲弊（マインドダウン）を起こしたからである。こうなった以上、ポーションで補給するか時間経過での回復を待つかであったが、残量の心もとないポーションを使う選択肢は無く、例えポーションで補給してもすぐに動けるようになるわけでもないのでこの様である。
アイズの冷めた視線がマダオに突き刺さる。
あれから一変してこうなのだから、仕方ないともいえるがマダオにしてみれば理不尽極まりなかった。
「い、息が……おおぅ」
「精神疲弊（マインドダウン）で寝込んでるのに、容赦ないわね」
姉のティオネの言葉にマダオが頷く。
「いいんじゃない？　別にあたしも見たかったなーとか、アイズだけずるいなーとか、今回の遠征は消化不良だーとか……うがぁ！」
「俺を乗せた状態で荒ぶるなっ！　しょうがないだろ緊急事態だし！　別にあのモンスターとの戦い楽しくなんてなかったし！　遠征に関しては最早俺関係なくない!?」
「そっちじゃなーい！　はぁ、マダオが察してくれるなんて、元々期待

してないけどさー？」
「いや、俺に何期待してんのさ……」
するとティオナが溜息をつく。
それにティオネ、レフィーヤ、リヴェリア、トドメにアイズまで溜息をつく。
ここまで呆れられるようなことか!?とマダオは愕然とし項垂れた。
「あーもう、どしようかなこの……行き場のない昂りは！」
「後でダンジョン潜って解放してこい」
「むか。よーし、帰ったら久しぶりに鍛練しよう」
「俺抜きでだよね？　そうだよね？」
「まっさか……あ、アイズはお預けね」
「!?」
期待に目を輝かせていたアイズが消沈する。
しかし今回は思うところがあるのか渋々ながら同意するように頷くと肩を落とした。
「俺は？　ねぇ俺は？」
「一緒に決まってるでしょ！　まだ教えてもらいたい事はあったし！」
「あら、それだったらあたしも混ぜなさい。中途半端で嫌だったのよ」
「やめろぉ！　アマゾネス姉妹が揃うとか俺を過労死させる気か!?フィン、フィーン！」
「僕は困った時のお助けキャラじゃないんだけどね……ほどほどにしてあげなよ？」
「はい、団長！」
「止まってない！　根本的解決になってない！」
しかし無情。
フィンは巻き込まれまいと一人先に進みマダオは取り残された。
覚えてろよと呟けば、団長に何かしたら分かってるよな、とアマゾネス姉の声が背筋を震わせる。
理不尽なと再び項垂れるマダオを他所に、ティオナはつい先程の戦いを思い返す。

「結局、あのよくわからないモンスターが原因なんだよね？」
「未確認のモンスターで、おまけに体内に武器を溶かす腐食液持ち……厄介ね」
そうぼやいたティオネが思い出したかのように、巨峰のような豊かな胸の間から一つの魔石を取り出した。同時にその光景をジっと見ていたマダオの目の前に音も立てずに現れたアイズが細い二本の指を突き出した。ギャアアアという叫び声は華麗に無視され、ピクリとも動かなくなったマダオを無視して話は進む。
「あのモンスターから抉りだした魔石なんだけど……変わった色をしてるのよね」
「うげぇ、あれに腕突っ込んだの？　……ホントだ、変な色」
アイズもひょこりと顔を覗かせてその魔石を覗き見る。
多くのモンスターを倒したものの、腐食液は魔石すら溶かすのか灰の後には何も残っていなかった。直接腕を突っ込んで、モンスターの中から溶ける前に取り出したティオネだけがこの魔石を回収することができていた。
実際はマダオも取り出すことに成功していたが、反応すら示さない。
「普通のがこう、紫っぽいのに……」
ティオナの視線の先にある魔石は極彩色の輝きを持つ。
明らかに異常な魔石であり、色があのモンスターを連想させて気味が悪かった。

そうこうして歩き続け17階層のルーム。
複数ある通路から息を荒くした大量のモンスターが姿を現した。
赤銅のような筋肉質な肉体を持つ人型のモンスター――――ミノタウロス。彼らはルームを囲うように姿を現し、血走った目を向ける。が、ここにいるのは武器を失い疲弊していようと圧倒的な【ステイタス】の差を持つ冒険者たちだ。
結果は分かり切っている。

おまけに消化不足なティオナたちの八つ当たりが入るのだから、蹂躙されるのはモンスターの方である。

ひょいと捨てられたマダオがぐぇと声を上げる中、アイズたちによる蹂躙が始まる。

数分とせず数を減らした仲間を見て、ミノタウロスたちは恐怖を覚えたかのように背を向けて逃走を始めた。

――――前代未聞、モンスターの集団逃走である。

流石のベートも慌てて声を荒げるが、聞く耳持たずのモンスターたちは止まらない。

呆ける仲間たちに対してリヴェリアの声が飛び、各々が急いで逃走したミノタウロスを追った。タチの悪いことにこのミノタウロスたちは上層につながる通路を突き止めては登り、突き詰めては登り、でたらめに階層を走り回り追手であるアイズたちを攪乱した。

一人、また一人と場を離れる仲間たち。

そしてその中には回復して動き回れるようになったマダオの姿もあった。

「ひ、人使いの荒い！　いや、まぁ人命かかってるからしょうがないけど」

ある程度回復していたマインドに加え、リヴェリアにより無理やり飲ませられたポーションにより回復したマダオ。

当然回復させられた目的は追っての増員であり、その為にマダオはただ一人上へ上へと走っていた。片手に携えた剣が少し重く感じられるが、ミノタウロス如きに後れを取るような状態ではない。上層にいる新人たちが、格上のミノタウロスの手にかかる前に止めなくてはいけないのだから多少の無理は通す。最低な大人はマダオの目指すところではない。

その道中、見つけた。

今にも上の階層に登ろうとしている、赤銅の体を。

「まぁぁぁぁてぇぇぇぇぇい!!」

マダオの足元が爆散し、加速する。

ミノタウロスは振り向きもせず、『ヴォオオオオオオオ！』と上の階

へと姿を消した。
どこまで登るつもりなのか、マダオがたどり着いたのは五階層であった。
そして、耳が捉えた。
「ヴヴォォォ

エピローグ

ベル・クラネルはその日、目指すべき目標をその背中に見出した。

祖父に言われて憧憬を抱き、ダンジョンに出会いを求めてやってきた。響き渡る悲鳴、駆けつける自分、華麗に救い出し翻した剣で一閃。怪物は打ち倒され、地面に座り込む美少女と視線が絡む。そんな出会いを夢に見た。

時には酒場でならず者を倒し、時にはライバルと競い合い、時には女の子と仲睦まじい姿を他の子に見られ嫉妬され。

子供から少し成長した少年ならば、誰もが一度は考えそうな事。

それを現実にしたいがためにここにいた。

何度も読んだ英雄譚、その英雄に憧れた青臭い少年。

それがベル・クラネルという少年だった。

今日にいたり、成長しないし戦えないし、挙句の果てにいるはずのない場所に現れた格上のモンスターミノタウロスに殺されかける。何一つ、憧憬が現実になることもなく最悪ばかりが降り注ぐ。英雄になる前に、美少女と出会う前に死んで終わる。

（――――出会い、訪れなかったなぁ）

半ば諦め尻もちをついた――その時。

ベル・クラネルは出会った。

（――――銀色の、背中）

恐ろしい化け物相手に一歩も引くことなく、片手でその剛腕を握りつぶす銀色の男に。

纏う空気は鋭く、しかしその後ろにいるベルはもう大丈夫なのだと安堵してしまうほど穏やかだ。そう確信してしまうほどに彼の背は大きく見える。いつの日か見た祖父の背、いつの日か見た憧れの英雄の姿だ。

片手に持つ銀色の剣は、彼のみが持つことを許された特別製。

気づけばミノタウロスは消失していて、残るは灰と魔石だけ。

圧倒的な力、引きこまれるようなカリスマ、洗礼された佇まい。
そしてこの状況だけあれば、ベルには十分すぎた。
憧憬が初めて現実に現れたのだから。
「――――英雄」
ピクリと肩を揺らした男の瞳は、そよぐ木々のような新緑色。
確定。
「――――ぼ、ぼくを」
怪訝な顔をする男。
しかしベルはそれどころではない。
目標を見つけ目標に至るための道を見つけた。
チャンスはそう巡っては来ない、なら今こそ動くとき。
少年の夢への執念が、ミノタウロスに追われ立つことすらできなくなった体に活を入れる。よく周りを見れば、いつの間にか美しい少女に獣人の青年が立っていたが、気に留めている余裕はベルにはなかった。
「――――ぼくを！」
「……お、落ち着け少年。そんな熱い視線で俺を見るな。俺はノーマル、おーけー？」
とてつもない勘違いをされてようとも！
「――――お願いします、僕を！」
「ダメだ、話が通じない。どこかのアイズを見てるようだ――冗談だって！　いや、ホントに落ち着こう少年!?」
先程までの雰囲気を霧散させ、妙にとっつきやすい雰囲気を纏う男。よく見れば彼の後ろには仲間と思われる美しい少女たちが立っており、金髪の少女が何か言いたそうな表情を浮かべている。
しかし、ベルの勢いはとどまることを知らない。
その勢いに外野まで呆然とする中で、ベルは息を切らせて言い切った。
「お願いします！　僕を、僕をあなたの弟子にしてください――――！」
「!?」

「!?」
「!?」
驚愕に顔を歪めたのは、当人たる男――マダオだけではなかった。

「エイナさぁあああああああああんっ！」
「ん？」
ダンジョンの運営管理をするギルド。
その窓口受付嬢でありベル・クラネルのアドバイザーでもあるエイナ・チュールは自分を呼ぶ声に顔を上げる。
彼女はハーフエルフであり、ほっそりと尖った耳にエメラルドの瞳。セミロングの髪はブラウンで美しい。とはいえリヴェリアのような「完璧」ではなく、どこか角が取れて親しみやすい風貌である。ギルドの制服がよく似合う美人。
今日も無事だったんだと、声の持ち主に当たりを付けて安堵のため息。
わずか十四歳の少年が今日も無事に帰ってきたことに頬が緩み、
「エイナさぁあああああああああんっ！」
目の前に現れた、妙に興奮している少年の話に耳を傾けた。
「ろ、ロキ・ファミリアのマダオさんについて教えてください！」
「……却下」
同時に、なんてものと関りを得てしまったんだともう一度溜息をついた。
【ロキ・ファミリア】のマダオ。
太陽のような金色の髪に穏やかな新緑の瞳。容姿もまた整っており、神に劣ることもない。非常に見目麗しい冒険者であり見た目だけならば結婚したい男ナンバー1と評されるフィン・ディムナといい勝負である。
かつては。

それは以前、彼が精力的に冒険していた時期の話である。エイナも人づてに聞いただけなので詳しくは知らないが、昔の彼は本当に見目麗しかったのだとおばちゃんたちは言う。

現在の彼といえば髪はボサボサで目もほぼ片方は隠れてしまっている。おまけに無精髭まではやしたおっさん風だ。年齢は知らない。

そして彼の中身が問題であった。

何をするにもやる気がなく、【ロキ・ファミリア】の遠征時何故か街中でその姿を見かける。要は遠征に参加せず街をぶらついているのである。あれでも幹部の一人である男がそれでいいのかと、エイナ・チュールは思わずにはいられない。全くダメな大人である。頼りなさそう以前の問題だ。

おまけにお酒が大好きで、どこから捻出したのかも分からないお金で沢山の酒を買っていく（ロキの為に買ってるに過ぎない）

加えてよく聞こえてくるのは、遠征の日なのに広場のベンチで爆睡する姿が見られるだとか、ふらりと路地裏に入っていったとおもったらどこか疲れ切った顔で大量の金貨を抱えて出てきたりと碌な話ではない。

おまけに最近ではだんぼーるなるものを人に薦めている場面もちらほらと見える。家いらず、布団いらずとかあの紙みたいな板持って何を言っているのか訳が分からない。

かつ、エイナ・チュールは見てしまった。

小さい子にやたら優しい紳士の姿を。

荒んだ心が洗われるようだと呟くその姿に、エイナは危機感を抱いた。

あれはダメだ、危険な男だと。

ただのロリコンだと！

「よりにもよって、マダオ氏なんて……何があったの、ベルくん」

そんなエイナの問いにベルが一部始終を語る。

命の危機を救われ、弟子入りしたいと言うところ全て。

話を聞いたエイナは取りあえず、安易に下層へと進んだことに一喝。そしてベルの命を救ってくれたという一件で若干マダオの評価

を上に修正し、どうしたものかと眉間に指を当てた。ギルドからの情報流出はご法度なのである。

よって伝えられるのは誰でも知ってるような最低限のものだけ。

だけなのだが……

「その最低限が、私の知ってる全てなんだよね……」

要は『全くダメな大人』

ここで少年の夢をぶち壊してもいいのか否か。

目を輝かせているベルを見て、エイナは迷いに迷う。

他に万人が知っているような、彼のいいところはないのか。そう考えたところで【ロキ・ファミリア】所属で幹部という情報を思い出す。

では他にはと考えたところで、小さい子供に優しいことを少し脚色を加えてベルの夢をぶち壊さない様に話すことにした。

「あ、あの【剣姫】さんと同じファミリアの人なんですね！　じゃあ、二つ名ってあるんですか!?」

二つ名。

それはランクアップした冒険者に、神によってつけられるもの。

その大半は神会に参加した神たちの娯楽が目的であり、神会の中でも相応の立ち位置にいないと可愛い子供たちに不名誉な二つ名がつくことも。その為その時の神会に自分の子の名が上がる神は必死に無難をえようと心身を削って挑むのである。

そして、エイナは気づいた。

「マダオ氏の、二つ名……？」

聞いたことがなかった。

あんな大手の【ファミリア】、そしてそこの幹部格。

そんな男の二つ名を、ギルド職員のエイナが知らないはずがない。

しかし現実、彼女は全く聞き覚えがない。

そこで、一つの可能性について思い当たる。

それは『今だランクアップしたことがない』という可能性である。

だがマダオは【ロキ・ファミリア】の幹部であり、此度の遠征には参加していたと風の噂を耳にした。おまけにランクアップしていなければ討伐は難しいミノタウロスを、ベルの話を信じるならばあっけ

なく倒している。
（……ちょっと、調べてみようか）
わくわくしているベルに知らないという事実を伝えながら、エイナは一人決意した。

ベルに教えられることを教えたエイナは、報告されているはずのマダオのレベルを確認しようと【ロキ・ファミリア】の資料を手に取る。このオラリオに存在する冒険者のレベルは報告の義務があり、そのレベルを詐称することは許されていない。
ちなみに【ステイタス】はスキルに魔法と個人の能力が示されている為報告の義務はない。あくまで目安としてレベルの申請は義務付けられている。故に【ロキ・ファミリア】の一人として登録されているマダオの情報は確かに存在している。
休憩時間の合間を縫って、同僚に訝しんだ視線を送られながらも資料をめくる。当然、あまり褒められたことではないのでこっそりと、最低限にだ。そうしてアイズ・ヴァレンシュタインやフィン・ディムナといった有名な冒険者の名前がページ送りにされ、ついにマダオのものと思われる一枚を見つけた。
そして、エイナは息をのむ。
マダオ――――Ｌｖ，１
何度見ても、その数値が変わることは無い。
間違いなくここに記載されているマダオのレベルは、１である。
信じられない気持ちでページをめくると、そこには付箋が張り付けられている。それは詐称を怪しむ一文が記載されており、その上からペンで数本の線を引かれかきけされている。恐らくはエイナと同じように勘付いた職員がいたのだろう。そして問題が解決したのか付箋を訂正した――――剥がすことはせず。
納得がいかなかったのか、剥がさなかった理由までは分からない。
次にエイナはギルドの記録を遡る。

自分と同じようにマダオの【ステイタス】がおかしいと感じた誰かが、きっと行動を起こしている。ギルドの手が入ったのは間違いなくその記録も見つけることができた。それが公になっていないのは、ギルドと【ロキ・ファミリア】の間で結ばれた何かがあるのか。

「――――【ロキ・ファミリア】のマダオ、Ｌｖ詐称の疑い。ギルドの介入を得て、【ステイタス】の一部を開示?!」

主神であるロキの許可を得たのか、マダオはギルドに対して【ステイタス】を開示したらしい。

その数値こそ記載されていないが、Ｌｖだけは間違いなく1であったと記載されている。完全にギルドの勘違い、マダオはいらぬ疑いをかけられ【ステイタス】の一部開示を余儀なくされた。その結果、「ギルドは【ロキ・ファミリア】に対して多額の賠償金を、かぁ。どこかで聞いたことがあるような話だけど……」

脳裏に浮かぶのは、イシュタル・ファミリアの一件。

彼の【ファミリア】もまたＬｖ．を偽っている疑いがかけられ、【ステイタス】の開示を要求。疑いは晴れ貴重な【ステイタス】の開示の代償として賠償金をがっぽりと持っていかれたという事件があった。どうにも酷似しているが、【ロキ・ファミリア】と【イシュタル・ファミリア】に繋がりは無い。

マダオの件が公になっていないのは本人の意向か、主神ロキの意向か、はたまたギルドの判断か。なんにせよ想像もつかない資金が動いたのは間違いないだろう。面倒事を知ってしまったと思いながら、エイナは資料を元の場所へと戻す。

ギルド職員なら誰でも知ることができる情報ではあったが、推奨されたものではない。

うっかり口を滑らすなんてことがあれば、間違いなく首が飛ぶ。

忘れてしまいたい、そう呟きながらエイナは休憩時間を終え自らの職場へと足を運ぶのであった。

その日の夜。

噂の本人であるマダオは、今回の遠征の打ち上げとして西のメインストリートで最大とされる酒場、『豊穣の女主人』へと足を運んでいた。ここは主神であるロキのお気に入りでもあり、店員が全員女性であること、ウエイトレスの制服が可愛らしいことから男性メンバーからの評価も高い。

本来ならばマダオも他のメンバーと同時刻に訪れる予定だったのだが、少々予定が入ってしまったので一人遅れていた。これも途中で視線を感じ裏路地に入った瞬間、筋骨隆々の男に襲われたせいである。もっと言えばその主のせい。

まぁ襲われたと言っても、精々反応できる程度に拳を振るわれただけだったので訴えるほどでもない。その後の男の主神との会話の方が色々と不味かった。なまじ美しい女性をよく見てきたことと、『魅了』に対する抵抗があったから良かったが、無かったらただの傀儡にされているところである。

「【ロキ・ファミリア】なんだけど……」

「いらっしゃいませ。【ロキ・ファミリア】であればあちらの一角に」

「ども、リューさん」

礼儀正しいエルフの少女に礼を言い、足を向ける。

すると何か騒いでいる狼人族の青年――ベートが目に入る。

そして同時に俯き、肩を震わせる見覚えのある少年。やがてベートの声が大きくなるにつれ、白い少年はガタンと席を立ちマダオの横を走り抜けていった。

「――ベートは後で絞める……リューさん、ウチの団員に俺が参加できなくなったこと伝えといてもらえません？」

エルフの少女はきょとんとした後、貴方らしいと呟き了承の意を示す。

チャリンと小銭をリューへと手渡し、マダオは珍しく他人へ関わることを決めた。

「マダオさん、これは……」

「少年の分！　後で返してもらうから気にしないでー！」

「いえ、足りてません――――」

一人『豊穣の女主人』を出たマダオは、走り去っていく白い少年の背中を捉える。

恐らくベートが大きな声で吠えていたことは、少し前のミノタウロス逃走事件の話だろう。ベートの性格を考えれば、何を言っていたのかは大体が予想がつく。そしてそれを聞かされた少年がどんな行動を起こすのか。ああいった人間の反応は二種類ある。

挫けて逃げ出すか、屈辱を噛みしめて力へと変えるのか。

先程すれ違ったさいに見た少年の真紅の瞳は――――折れてなんていなかった。

「いい根性してるよ、ホント」

目指したのはバベル。

その地下に存在している――――地下迷宮である。

そこで見たのは、いつか見た『正義の味方』を目指す少年と同じ背中。

ボロボロになって自分の傷なんて顧みず、愚直なまでに前へと進もうとする姿だ。もし白い少年の願いが同じ『正義の味方』であるのならば、マダオは間違いなくその道を絶たせるために立ちはだかる。そうやって少年の夢を閉ざしたかつてがある。

しかし、

「――――何を目指して、そんなボロボロになるんだ」

力を欲しているのは分かる。でもそれ以外は分からない。

そんな時、彼が弟子にしてくれといっていた瞬間の時を思い出した。彼の目に宿る憧憬と自分の困惑した姿。それは昔、アイズから向けられたものによく似ている気がするも、また少し違う気もしている。

『英雄』に憧れる少年と少女。
でもその二人の間にある違いが分からない。
「――――聞いてみたいな。なんで『英雄』に憧れるのか。もしかしたら俺の勘違いなのか」
いつの間にかウォーシャドウに囲まれる少年の姿を見て、拳を強く握る。
ここにマダオの愛剣はなく、あるのはこの身と拳のみ。それでも浅い階層の敵なぞ問題になりはしない。いつだって助けに入れるし連れ帰ることはできるのに、今この場に介入するのが戸惑われた。
何故、と自問自答すれば思い浮かぶのは『自分』と戦う『正義の味方』を目指した少年。
「……つくづく、変わった奴と縁があるのか」
傷つきながらも進み続ける少年の背を見届けながら、マダオはいつでも助けに入れるように眼前の光景を目に焼き付けた。
この出会いが、かつてを取り戻す切っ掛けになると欠片も知らずに。